

2022年度（第4回）  
学生生活調査報告書

神戸市外国語大学

### 〈注記〉

1. 本調査は4回目の調査である。本報告書の作成にあたっては単純集計を基礎として、適宜第1回～第3回調査との比較を行っている。さらに必要に応じて分析をしている。
2. 以下の規則に従い集計している。
  - ① 各集計結果の百分率は小数点以下第2位を四捨五入し、小数点第1位まで表示しているため、合計が100%にならない項目がある。
  - ② 平均は、特に断りがある場合を除き無回答・無効回答を除いた回答を対象とする。
3. 各項目の満足度を聞いた質問で、肯定的評価の比率とは「満足」「やや満足」を合計したものであり、否定的評価の比率とは「不満」「やや不満」の合計である。

## はじめに

神戸市外国語大学では、教員と職員が、自分の能力を最大限に発揮して仕事をしています。しかし、時には、組織には、メンバーが同じ目的を念頭に置き、チームとしてうまく機能しているかどうかを確認するために、目の前の仕事から少し距離を置き、現実を客観的に分析することも必要です。特に、大学としては、学生をよりよく知るために、学生の日常生活に関するデータが欠かせないものです。ここで紹介する学生生活調査を3年ごとに実施しているのは、学生一人ひとりを大切に思っているからです。

データは、集団行動の傾向を反映しています。しかし、データが抽象的な問題を示しているのではなく、これらのデータは、現実の人々の具体的な問題を反映しているのです。調査結果を通じて大学の様子を俯瞰的に観察した後、その傾向に影響されている学生一人ひとりを確認する必要があります。学生たちの日常生活に問題はないか？より良いケアをするためにその質問に答えるべきです。

今回紹介する調査結果は、コロナ禍に起因すると思われる傾向を反映したものです。しかし、以前からあった傾向、あるいは今後も続く傾向があるかもしれず、私たちはこれからも注意を払う必要があります。例えば、居住形態（図1-3）は、自宅が増加しつつあり、自宅以外で暮らす選択している学生は減っていることがわかります。自宅暮らしを優先するあまり、遠方から通学する学生が多いということなののでしょうか。学生生活の目的（図2-1）をよく観察してみると、「専門分野について深く学ぶ」や「幅広い知識を身につけること」が減って、「友人を作り、良い人間関係を広げること」、「将来の仕事に役立つような力を身につけること」、「自分の将来の方向を見つけること」等の意見が増えています。私たち教員は、知識を得る美しさを学生にうまく伝えているのでしょうか？さらに心配なのは、大学生活に満足していない学生が常に10%いることです（図2-2）。その気持ちを改善するために、私たちにできることはあるのでしょうか？

学生支援部会で調査結果を分析してみました。データをご覧いただき、大学について何がわかるかをお読みになって、解釈してみてください。学生たちの生活をより良いものにするためにどのように貢献できるのでしょうか？ご意見、コメント等ございましたら、学生支援班までお知らせください。ご感想をお待ちしております。

At Kobe City University of Foreign Studies, both faculty members and administrators work with the utmost dedication. However, for an organization to make sure that its members have the same goal in mind and are functioning well as a team, sometimes it is necessary to take some distance from the work at hand and analyze reality objectively. Data on students' daily lives is essential for a university to get to know its students better. We conduct the student life survey presented here every three years because we care deeply about each and every one of our students.

Data reflect trends in collective behavior. However, these data do not indicate abstract problems: they reflect the concrete problems of real people. After observing the university from a bird's eye view through the survey results, it is necessary to identify each student who is affected by a particular trend. We must ask ourselves: Are there problems in the

students' daily lives? To provide better care for our students, we should answer that question.

The findings presented here reflect trends that may be attributable to the corona pandemic. However, there may be others that have existed before or will remain, and we need to pay attention to them. For example, the type of residence (Figure 1-3) shows that the number of students choosing to live at home is increasing, while the number of students choosing to live outside their homes is decreasing. Could this result in many students commuting from far away to school because they prioritize living at home? A closer look at the purpose of student life (Figure 2-1) shows a decrease in answers such as "To learn deeply about a specialized field" and "To acquire breadth of knowledge," and an increase in responses of the type of "To make friends and expand good human relations," "To acquire skills useful for future work," and "To find my future path", etc. Are we, as faculty members, successfully conveying to our students the beauty of acquiring knowledge? Even more worrisome is the fact that there is a consistent 10% of students who are not satisfied with their college life (Figure 2-2). Is there anything we can do to improve this feeling?

The Student Support Committee has analyzed the survey results. Please take a look at the data and read and try to interpret on your own what they reveal about the university. How can each of us contribute to making students' lives better? If you have any suggestions or comments, please let us know at the Student Support Section. We would be grateful for any comments or suggestions.

2023年11月

学生支援部長 モンセラット・サンス

Dean of Students Montserrat Sanz

# 目 次

<b>1 調査の概要</b> .....	1
1.1 目的 .....	1
1.2 調査方法 .....	1
1.3 基本属性 .....	5
<b>2 調査結果</b> .....	9
2.1 学生生活全体の状況 .....	9
2.1.1 大学生活の考え方 .....	9
2.1.2 学生生活の（主観的）成果 .....	17
2.2 個別活動（正課教育と学習環境） .....	18
2.2.1 正課教育 .....	18
2.2.2 図書館 .....	19
2.2.3 学習のための施設（教室、自習スペース等）の満足度 .....	21
2.2.4 情報機器 .....	22
2.2.5 教員との交流 .....	22
2.3 個別活動（課外活動） .....	23
2.3.1 部活・サークル活動、ボランティア活動、語劇の状況 .....	23
2.3.2 ボランティア活動の状況 .....	26
2.4 個別活動（留学） .....	27
2.4.1 留学（オンライン含まず）の状況 .....	27
2.4.2 留学の形態 .....	30
2.4.3 オンライン留学の状況 .....	36
2.4.4 留学の支援体制について .....	37
2.5 個別活動（TOEIC、就職活動について） .....	40
2.5.1 TOEIC .....	40
2.5.2 その他の資格試験について .....	41
2.5.3 1、2、3 年生の卒業後に希望する進路 .....	45
2.6 個別状況（悩み、人間関係について） .....	47
2.7 大学への要望・期待について .....	50
参考資料 .....	51

## 1 調査の概要

### 1.1 目的

神戸市外国語大学では中期計画を定め、学生支援体制の充実を図ってきたところである。この調査は、学生の生活状況や意識などを把握し、学生支援のための基礎資料とすることを目的として実施した。今回は、2013年度（第1回）、2016年度（第2回）、2019年度（第3回）に続く、第4回目の調査である。

### 1.2 調査方法

#### 1) 調査実施期間

2022年11月7日(月)～11月25日(金)

#### 2) 調査対象

調査対象者は、2022年11月現在の本学学部・第2部在籍学生1,706人（休学者を除く）であり、全学生を対象者とした。

#### 3) 実施方法

##### ・1学年と2学年

1学年と2学年については、専攻語学の授業において、担当教員が「学生生活調査票」と封入封筒を配布・回収した。

##### ・3学年と4学年

3学年と4学年については、ゼミ(研究指導、卒業論文指導)の授業において、担当教員が「学生生活調査票」と封入封筒を配布・回収した。

##### ・オンライン受講の学生への対応

新型コロナウイルス感染症対策としてオンラインで授業を受講している学生もいたため、それらの学生に対しては郵送で配付・回収した。(郵送対象者193人、回答者数46人。ただし、郵送で受け取って直接回答を提出した可能性も考えられるため、正確な回答者数は不明。)

#### 4) 回答数・回収率

上記調査期間中の回答数は1,157人で、全体の回収率は67.8%であった。第1回調査(回答数1,124人、回収率60.7%)、第2回調査(回答数1,236人、回収率65.6%)と比較すると、回収率は増加しているものの、第3回調査(回答数1,303人、回収率71.8%)と比べると、回答数・回収率がともに減少している。

学科別の回収率については、6割～7割とばらつきがみられた。第2部英米学科の回収率は65%を下回った。これに対して、イスパニア学科は75.5%、中国学科も75.3%と、

比較的高い回収率を示している（表 1-1）。

2 学年、3 学年以上の学科・コース別回収率には相当程度のばらつきが見られるが、2 学年はロシア学科語学文学コース（100.0%）、中国学科経済経営コース（100.0%）イスパニア学科語学文学コース（100.0%）、同多文化共生コース（100.0%）、3 学年以上は中国語学文学コース（100.0%）、学部英米学科 ICC コース（95.5%）は特に高い回収率を記録した。逆に、2 学年の国際関係学科経済経営コース（21.4%）、同多文化共生コース（22.9%）、同リベラルアーツコース（22.2%）は、回収率が 3 割を下回る結果に終わった（表 1-2、1-3）。

表 1-1：学生生活調査実施状況一覧（学科、学年）

	1 年	2 年	3 年	4 年	学科合計
英米学科	113	71	86	104	374
	79.0%	49.0%	75.4%	72.7%	68.6%
ロシア学科	21	33	33	31	118
	46.7%	82.5%	70.2%	64.6%	65.6%
中国学科	38	37	26	42	143
	74.5%	67.3%	83.9%	79.2%	75.3%
イスパニア学科	30	36	20	19	105
	69.8%	92.3%	76.9%	61.3%	75.5%
国際関係学科	61	29	56	66	212
	69.3%	34.9%	83.6%	75.0%	65.0%
学部計	263	206	221	262	952
	71.1%	56.9%	77.5%	72.2%	69.0%
第 2 部英米学科	48	51	50	53	202
	57.8%	54.8%	76.9%	62.4%	62.0%
合計	311	257	271	315	1154
	68.7%	56.5%	77.4%	70.3%	67.6%

表 1-2：学生生活調査実施状況一覧（学科、コース、2 学年）

学科	コース	2 学年	回収率
学部英米	語学文学コース	14	40.0%
	国際法政コース	6	40.0%
	経済経営コース	9	56.3%
	多文化共生コース	17	56.7%
	リベラルアーツコース	21	50.0%

	無効・無回答	4	—
	学科計	71	49.0%
ロシア学科	語学文学コース	5	100.0%
	国際法政コース	7	87.5%
	経済経営コース	4	80.0%
	多文化共生コース	5	71.4%
	リベラルアーツコース	10	83.3%
	無効・無回答	2	—
	学科計	33	82.5%
中国学科	語学文学コース	4	40.0%
	国際法政コース	5	41.7%
	経済経営コース	4	100.0%
	多文化共生コース	7	63.6%
	リベラルアーツコース	11	73.3%
	無効・無回答	6	—
	学科計	37	67.3%
イスパニア学科	語学文学コース	9	100.0%
	国際法政コース	4	80.0%
	経済経営コース	5	166.7%※
	多文化共生コース	9	100.0%
	リベラルアーツコース	9	81.8%
	無効・無回答	0	—
	学科計	36	92.3%
国際関係学科	国際法政コース	4	44.4%
	経済経営コース	3	21.4%
	多文化共生コース	11	22.9%
	リベラルアーツコース	2	22.2%
	無効・無回答	9	—
	学科計	29	34.9%
無効・無回答		1	—
合計		207	57.2%

※100%を超えているのは、誤選択によるものと思われる。



表 1-3 : 学生生活調査実施状況一覧 (学科、コース、3 学年以上)

学科	コース	3 学年	4 学年	合計	回収率
学部英米	語学文学コース	17	22	39	61.9%
	法経商コース	28	40	68	82.9%
	総合文化コース	33	29	62	68.9%
	国際コミュニケーションコース (ICC)	8	13	21	95.5%
	無効・無回答	0	0	0	—
	学科計	86	104	190	73.9%
ロシア学科	語学文学コース	13	9	22	68.8%
	法経商コース	6	9	15	75.0%
	総合文化コース	14	11	25	64.1%
	国際コミュニケーションコース (ICC)	0	2	2	50.0%
	無効・無回答	0	0	0	—
	学科計	33	31	64	67.4%
中国学科	語学文学コース	5	14	19	100.0%
	法経商コース	14	15	29	82.9%
	総合文化コース	7	11	18	62.1%
	国際コミュニケーションコース (ICC)	0	0	0	0.0%
	無効・無回答	0	2	2	—
	学科計	26	42	68	81.0%
イスパニア学科	語学文学コース	7	9	16	88.9%
	法経商コース	8	2	10	76.9%
	総合文化コース	5	8	13	52.0%
	国際コミュニケーションコース (ICC)	0	0	0	0.0%
	無効・無回答	0	0	0	—
	学科計	20	19	39	68.4%
国際関係学科	国際関係学科 (コース選択なし)	51	64	115	77.7%
	国際コミュニケーションコース (ICC)	4	1	5	71.4%
	無効・無回答	1	1	2	—
	学科計	56	66	122	78.7%
学部計		221	262	483	74.5%
第 2 部英米学科	英語学・英語研究コース (第 2 部)	15	7	22	71.0%
	英語圏文化・文学コース (第 2 部)	19	25	44	73.3%
	法経商コース (第 2 部)	16	19	35	59.3%
	無効・無回答	0	2	2	—
	学科計	50	53	103	68.7%
無効・無回答		0	0	0	—
合計		271	315	586	73.4%

### 1.3 基本属性

回答数による男女比は、男性 30.9%、女性 67.0%となっており、在籍学生の男女比とおおむね一致している(図 1-1)。なお、1.8%の解答者が「無回答」を選択していることは、大学におけるジェンダー問題の取り組みに慎重な配慮が必要とされることを示唆している。

なお、学科・コースごとに回答数が異なることから、調査結果には回答数の多い学科・コースの影響が強く出る点に注意する必要がある。(表 1-4~6)。

図 1-1：性別

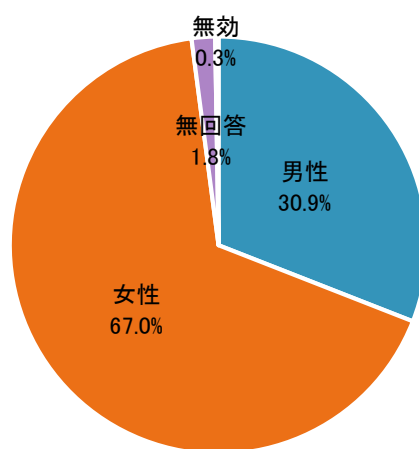


表 1-4：学科

	第 4 回		第 3 回		第 2 回		第 1 回	
	回答数	構成比	回答数	構成比	回答数	構成比	回答数	構成比
1. 学部英米	374	32.3%	416	31.9%	388	31.4%	348	31.0%
2. ロシア	118	10.2%	111	8.5%	92	7.4%	87	7.7%
3. 中国	143	12.4%	150	11.5%	123	10.0%	138	12.3%
4. イスパニア	105	9.1%	135	10.4%	117	9.5%	101	9.0%
5. 国際関係	212	18.3%	247	19.0%	251	20.3%	211	18.8%
6. 第 2 部英米	202	17.5%	239	18.3%	259	21.0%	236	21.0%
無効・無回答	3	0.3%	5	0.4%	6	0.5%	3	0.3%
合計	1,157	100.0%	1,303	100.0%	1,236	100.0%	1,124	100.0%

表 1-5 : 所属コース (2 学年)

学科	コース	回答数	構成比
学部英米 ロシア学科 中国学科 イスパニア学科	語学文学コース	32	15.5%
	国際法政コース	22	10.7%
	経済経営コース	22	10.7%
	多文化共生コース	38	18.4%
	リベラルアーツコース	51	24.8%
国際関係学科	国際法政コース	4	1.9%
	経済経営コース	3	1.5%
	多文化共生コース	11	5.3%
	リベラルアーツコース	2	1.0%
	無効・無回答	21	10.2%
合計		206	100.0%

表 1-6 : 所属コース (3 学年以上)

学科	コース	回答数	構成比
学部英米 ロシア学科 中国学科 イスパニア学科	語学文学コース	96	16.4%
	法経商コース	122	20.8%
	総合文化コース	118	20.1%
	国際コミュニケーションコース (ICC)	23	3.9%
国際関係学科	国際関係学科 (コース選択なし)	115	19.6%
	国際コミュニケーションコース (ICC)	5	0.9%
第 2 部英米学科	英語学・英語研究コース (第 2 部)	22	3.8%
	英語圏文化・文学コース (第 2 部)	44	7.5%
	法経商コース (第 2 部)	35	6.0%
	無効・無回答	6	1.0%
合計		586	100.0%

年齢については、19歳が20.1%と全体の5分の1を占めている (図 1-2)。

居住形態は、自宅57.0%、自宅外42.7%で、自宅が過半数となり、前回同様自宅外を上回った (図 1-3)。特に1~3年生において自宅に居住する学生が50%台 (1年生55.1%、2年生50.8%、3年生55.0%)、自宅外に居住する学生が40%台 (1年生44.6%、2年生48.8%、3年生44.6%) だったのに対し、4年生は自宅に居住する学生が65.7%、自宅外に居住する学生が34.3%と顕著な差が生じている (図 1-4)。これは4年生後期という調査時期もさることながら、在学期間中の大半がコロナ禍にあって自宅からのオンライン受講の時期が長

かったということが影響している可能性が高い。

入学時の入試形態は、一般入試（第1志望）で受験が61.2%で最も高い（図1-5）。

図1-2：年齢構成

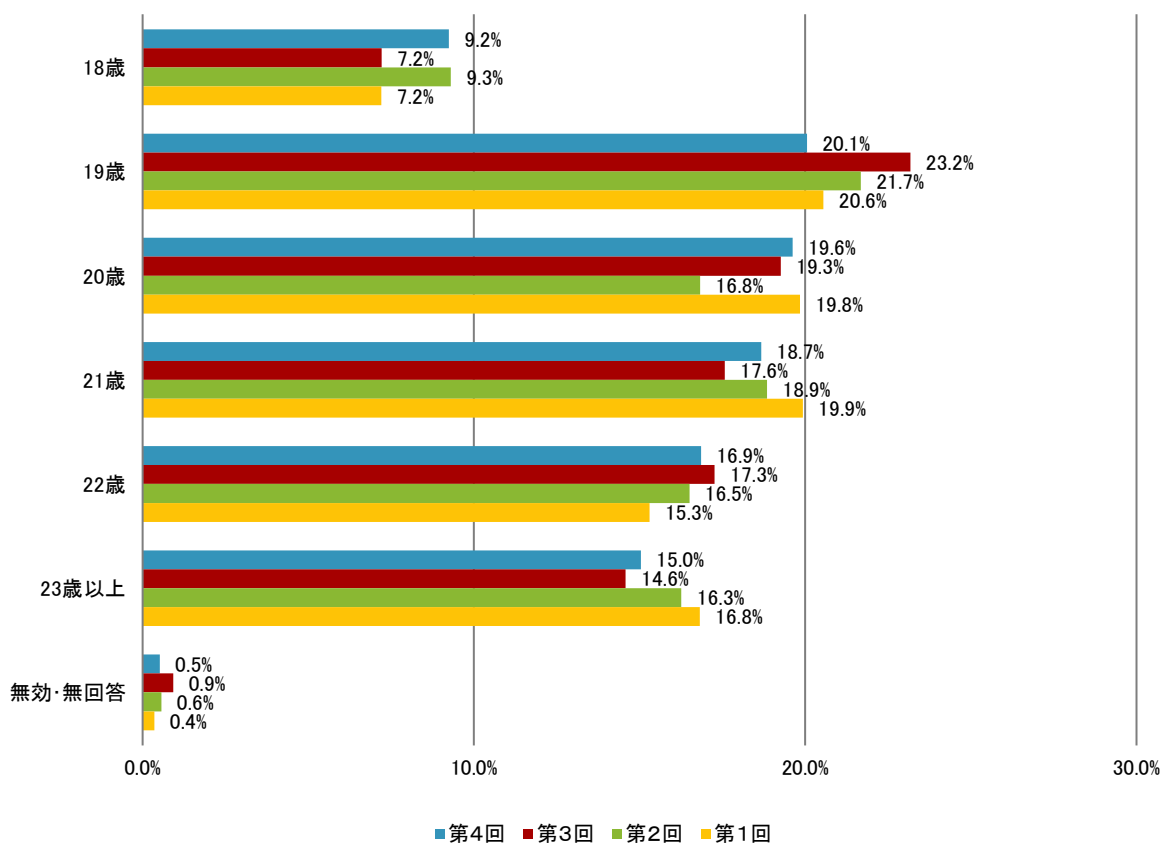


図1-3：居住形態

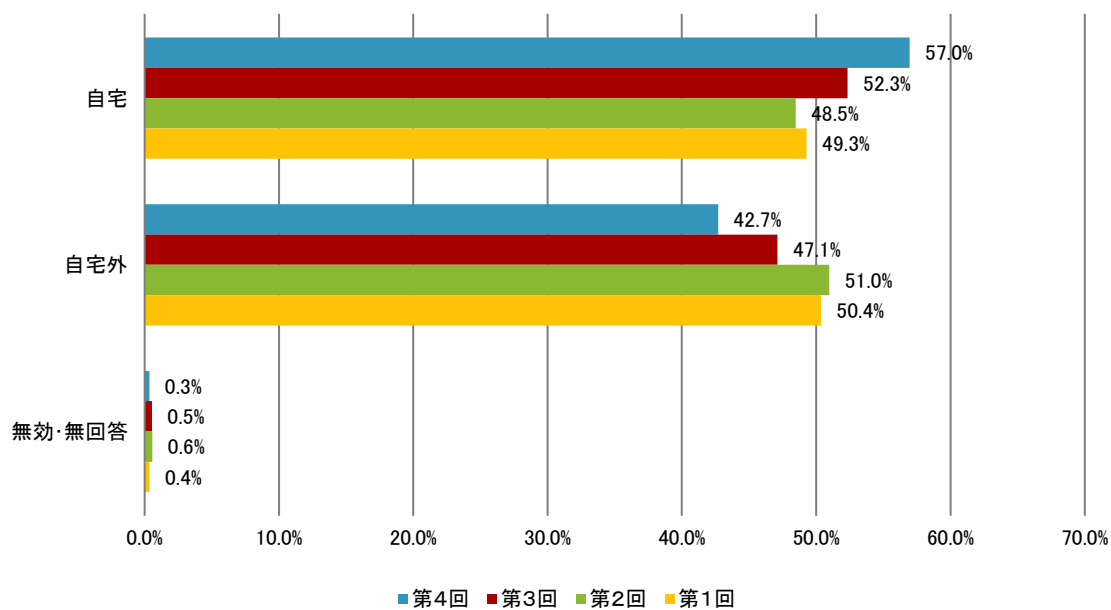


図 1-4 居住形態（学年別）

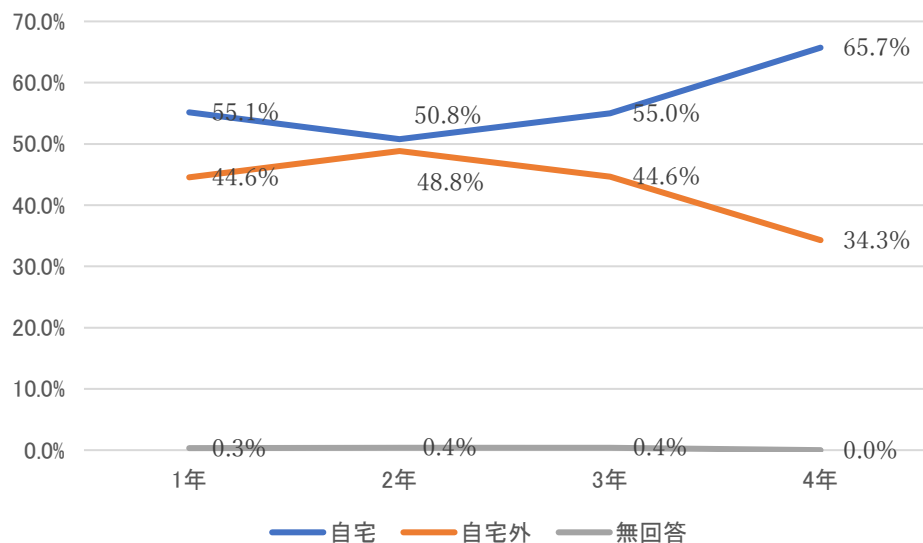
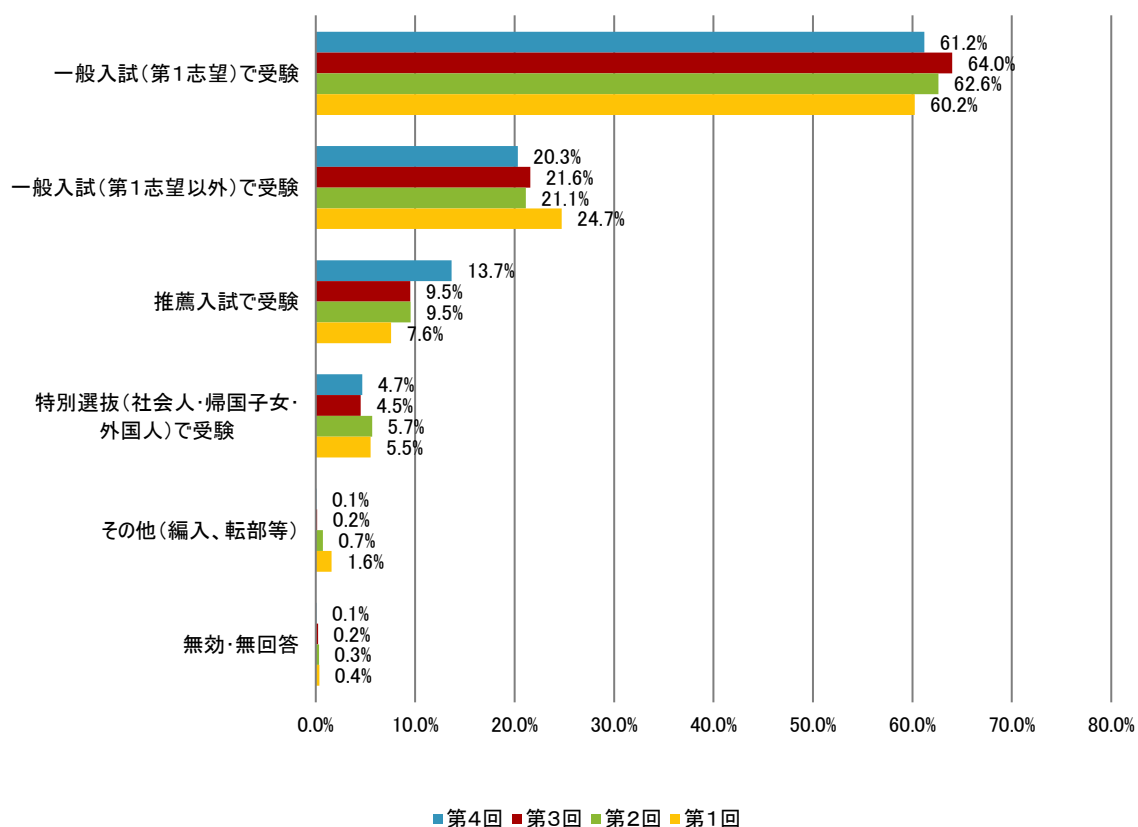


図 1-5：入試形態



## 2 調査結果

### 2.1 学生生活全体の状況

#### 2.1.1 大学生生活の考え方

##### 1) 大学生生活の考え方

「自分の将来の方向を見つけること」27.4%、「幅広い知識を身につけること」18.9%、「専門分野について深く学ぶこと」16.8%の割合が高い。上位3項目は第1回、第2回、第3回調査と同じである。今回は、第3回と同様に「自分の将来の方向を見つけること」が伸びたものの、「幅広い知識を身につけること」と「専門分野について深く学ぶこと」が減少している（図2-1）。

学生生活の総合的評価は、「満足・やや満足」が57.6%（666人）、「不満・やや不満」が10.9%（126人）となっており、第1回の結果（「満足・やや満足」が53.4%600人、「不満・やや不満」が13.1%147人）、第2回の結果（「満足・やや満足」が56.6%699人、「不満・やや不満」が10.5%129人）、第3回の結果（「満足・やや満足」が57.9%755人、「不満・やや不満」が11.4%149人）と比較して、「満足・やや満足」、「不満・やや不満」のいずれもがほぼ同じ傾向を示している（図2-2）。

図2-1：学生生活の目的

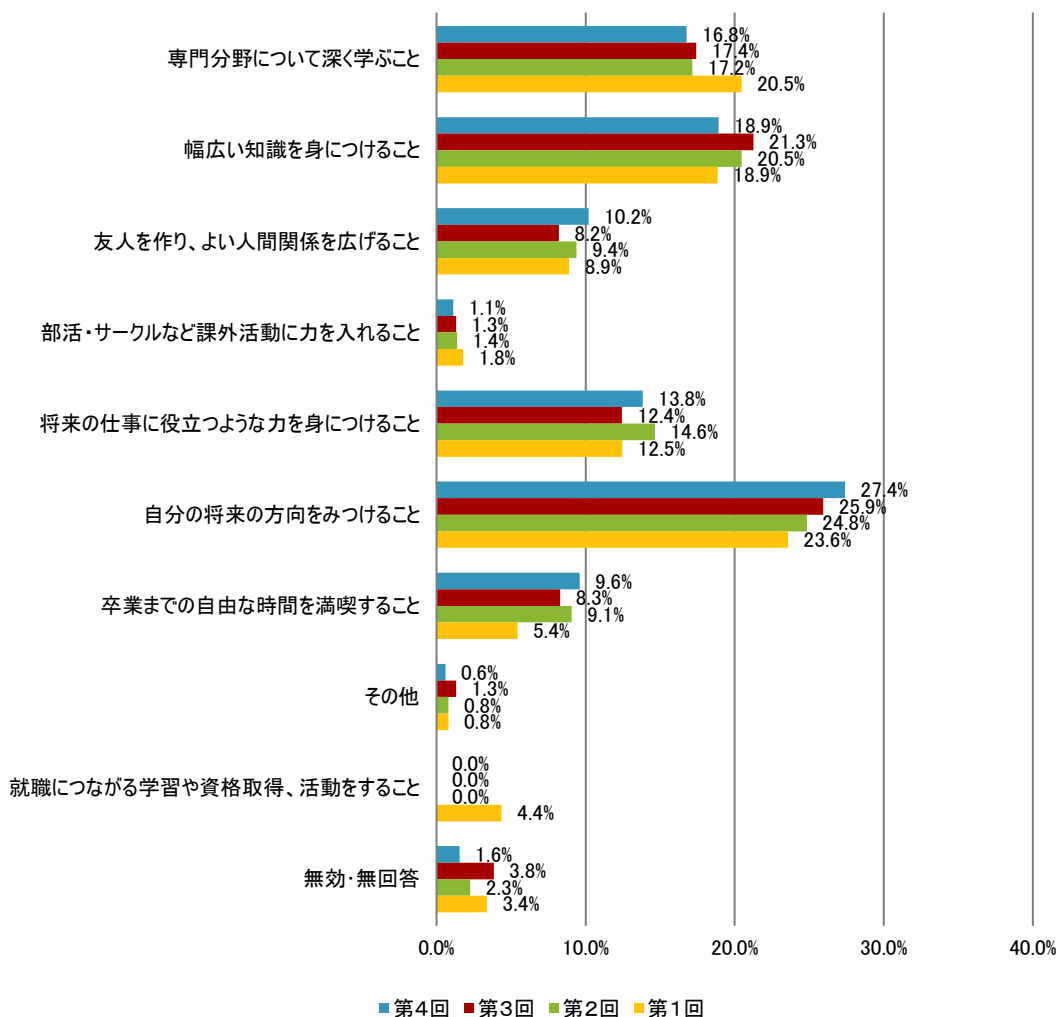
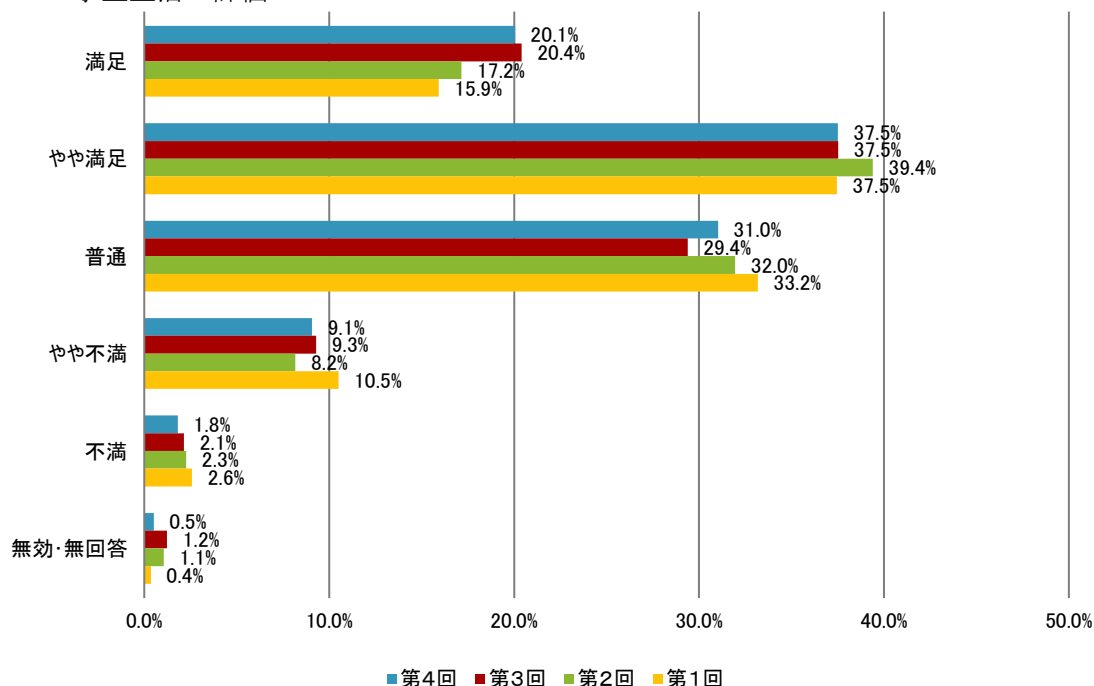


図 2-2：学生生活の評価



## 2) 経済状況

学生本人の月間収入の平均は14万7千円である。これは第3回と比べ1千円の減少であった。そのうち、自宅から通学している学生は13万4千円、自宅外から通学している学生は16万4千円となっている。自学外生は自宅生より3万円収入が多い(図2-3)。金額の違いはあれ、自宅外生の収入がより多いのはこれまでの調査と同様である。ただし、月間収入が10万円を下回る学生が32.8%と第3回よりも5.6%上昇している(図2-4)。この要因としては、新型コロナウイルス感染症流行の影響がしているように思われる。

授業料減免制度については、「制度を知らなかった」学生が12.4%であり、第3回よりも4.7%減少した。また「全額免除を受けた」と「半額免除を受けた」学生の合計が8.9%であり、第3回よりも4.3%上昇した(図2-5)。これについても新型コロナウイルス感染症流行の家計への影響が授業料減免制度利用者増加の要因の一つとして挙げられる。

就労状況において「パート・アルバイト」と「就労はしていない」が大部分を占める点においても、過去の調査と大きな変化は無い(図2-6)。ただし、「就労はしていない」が15.0%と、第3回よりも3.3%増加している。

図 2-3：月間収入合計（平均）

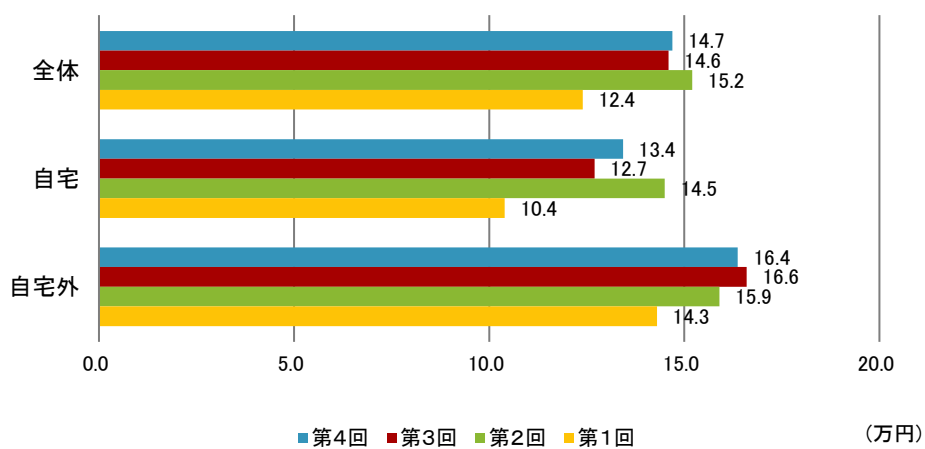


図 2-4：月間収入合計（平均）

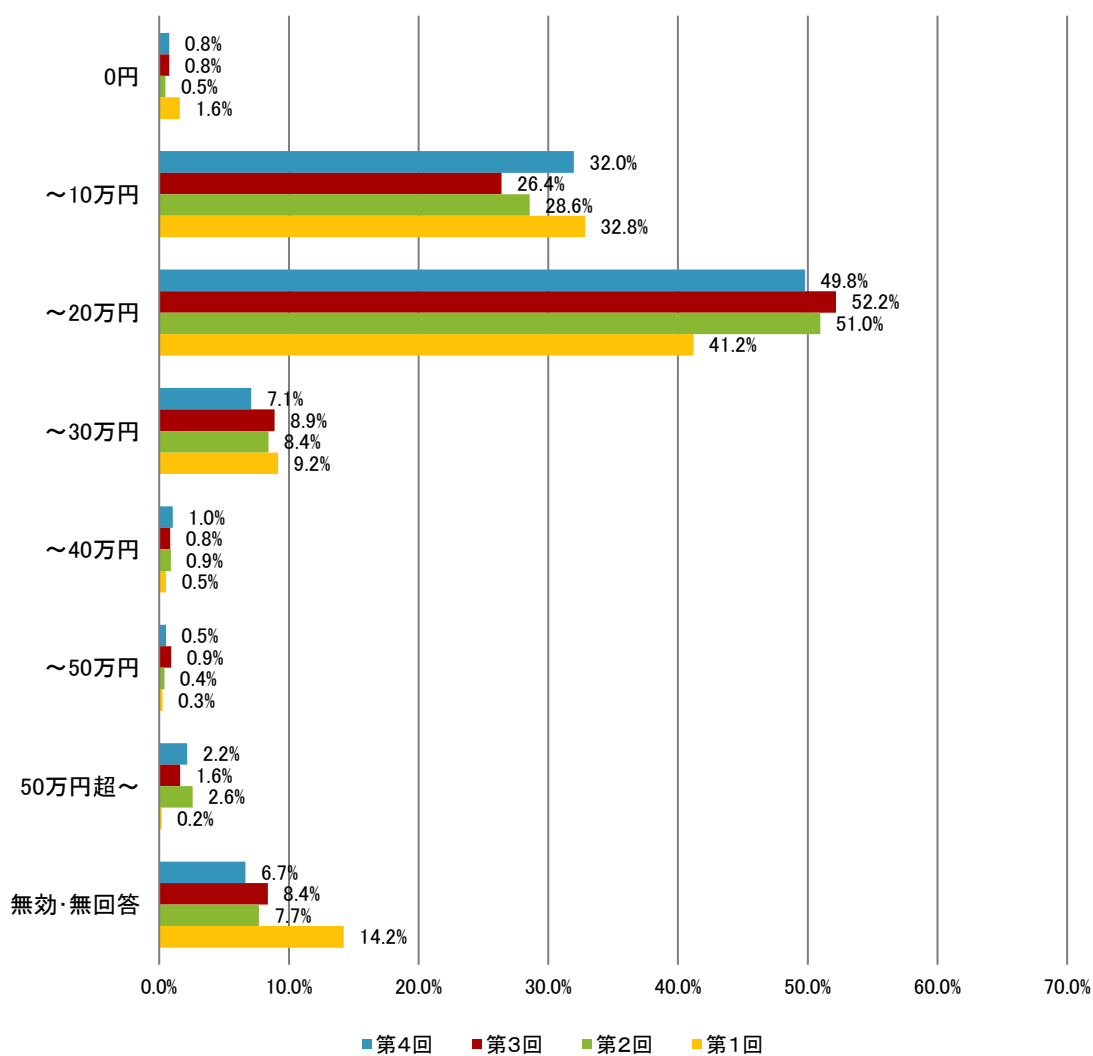




図 2-5： 授業料減免制度

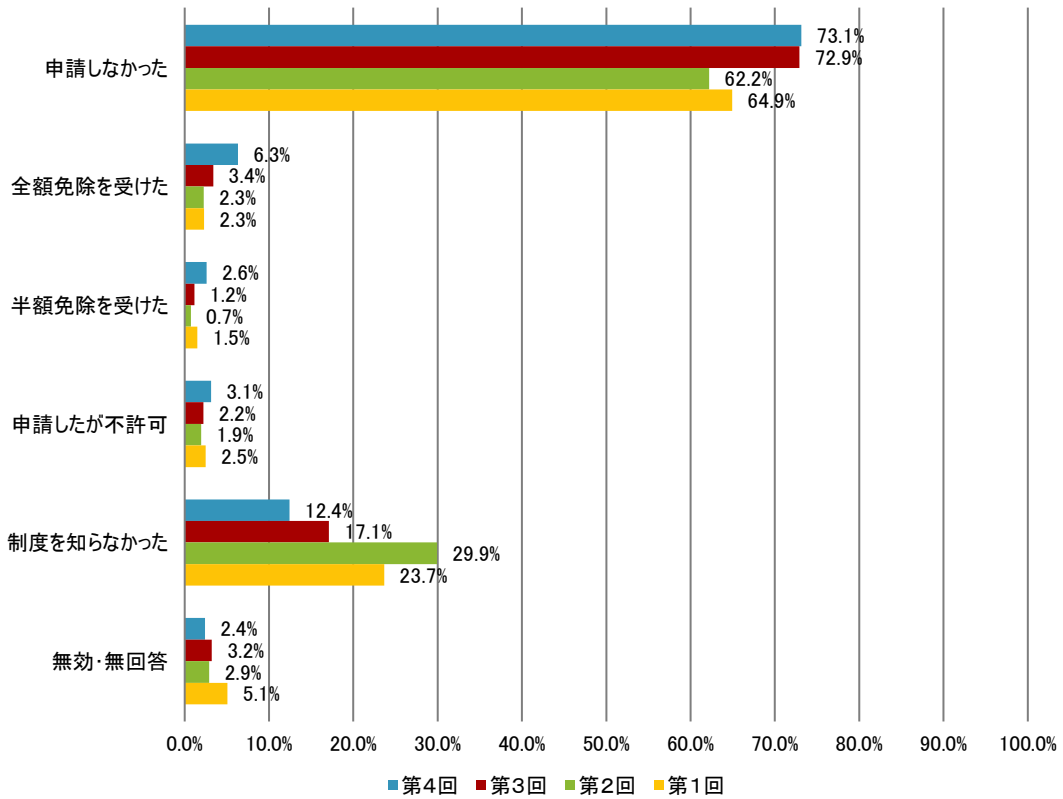
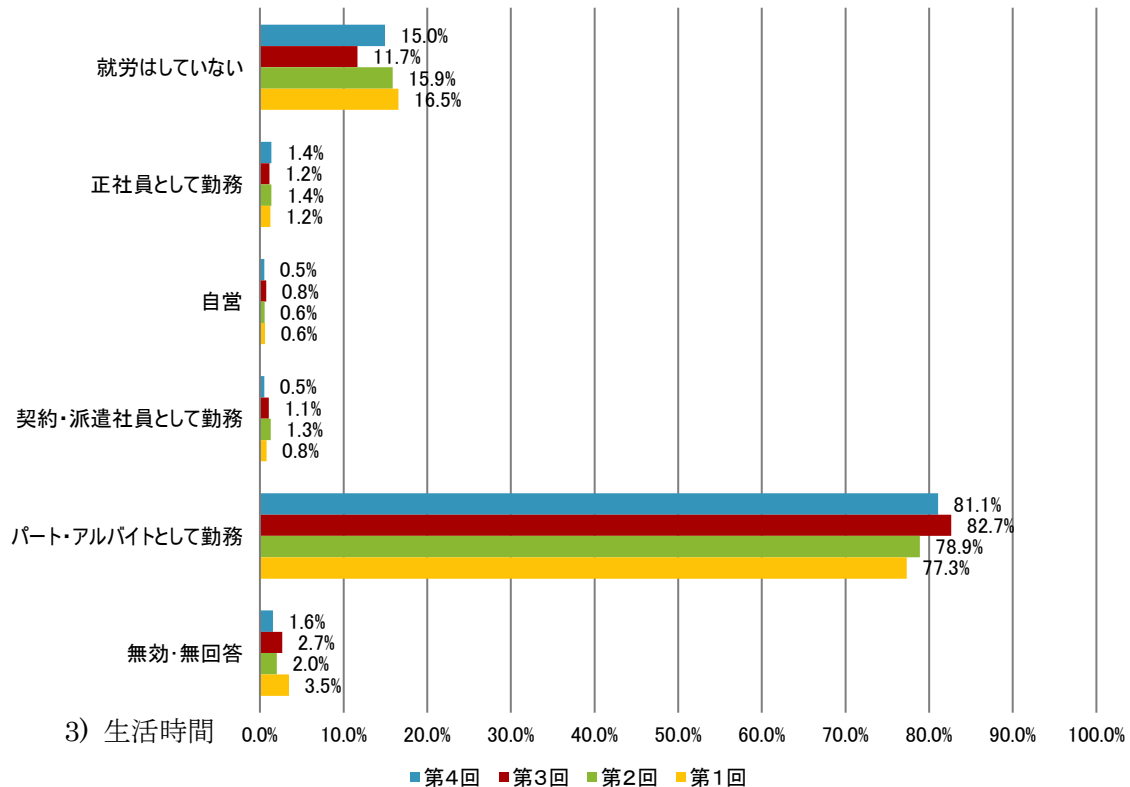


図 2-6： 学生本人の就労状況



3) 生活時間

平均的な一日像を「平日」と「土日祝日」に分けて調査した。平均時間の結果は以下の通りである（図 2-7、図 2-8）。平日の「勉強している時間」が土日祝日の倍となっているのは第 3 回と大きな変化はない。授業の有無が差を生んでいると考えられる。

また、必ずしも大きな差ではないが、平日・土日祝日ともに第 3 回と比べ、「部活・サークル活動」の割合が若干減少し、「娯楽・交遊活動」の割合が若干増加している。これらについては、新型コロナウイルス感染症流行に伴う部活・サークル活動の規制が影響したと推測される。また土日祝日の「アルバイト・定職活動」の割合が第 3 回と比べて減少している。

以上は平均値を比較したものである。分布を比較したものが図 2-9～14 である。

図 2-7：1日の生活時間（平日）

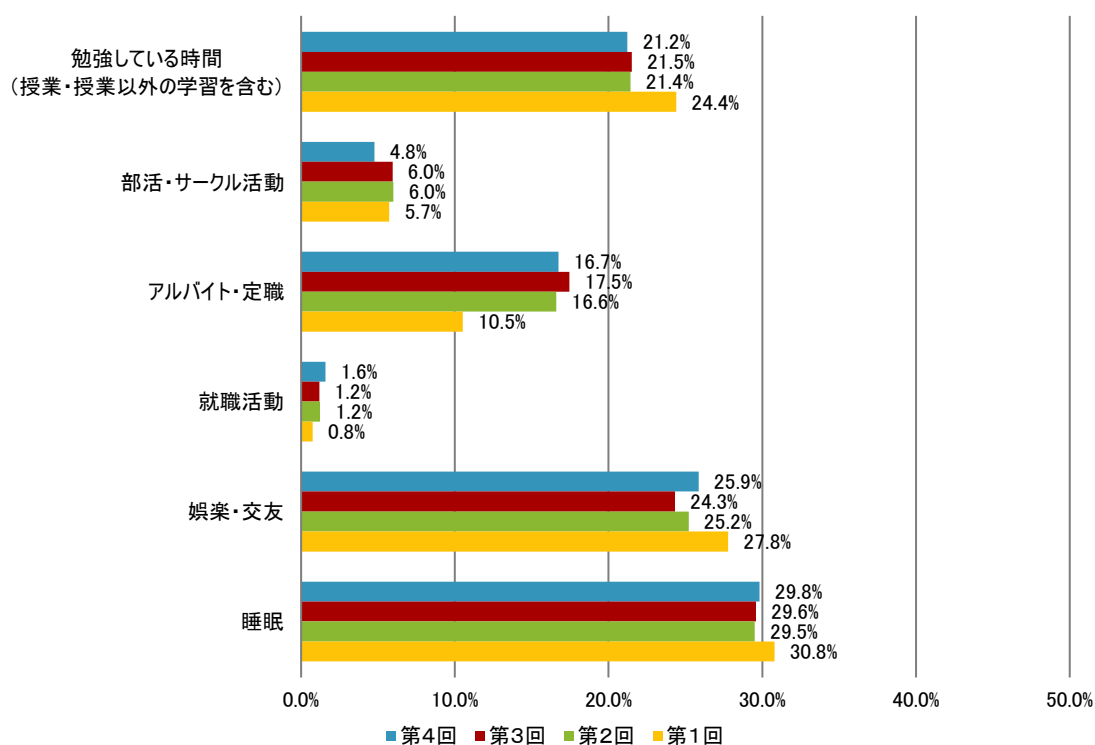


図 2-8：1日の生活時間（土日祝日）

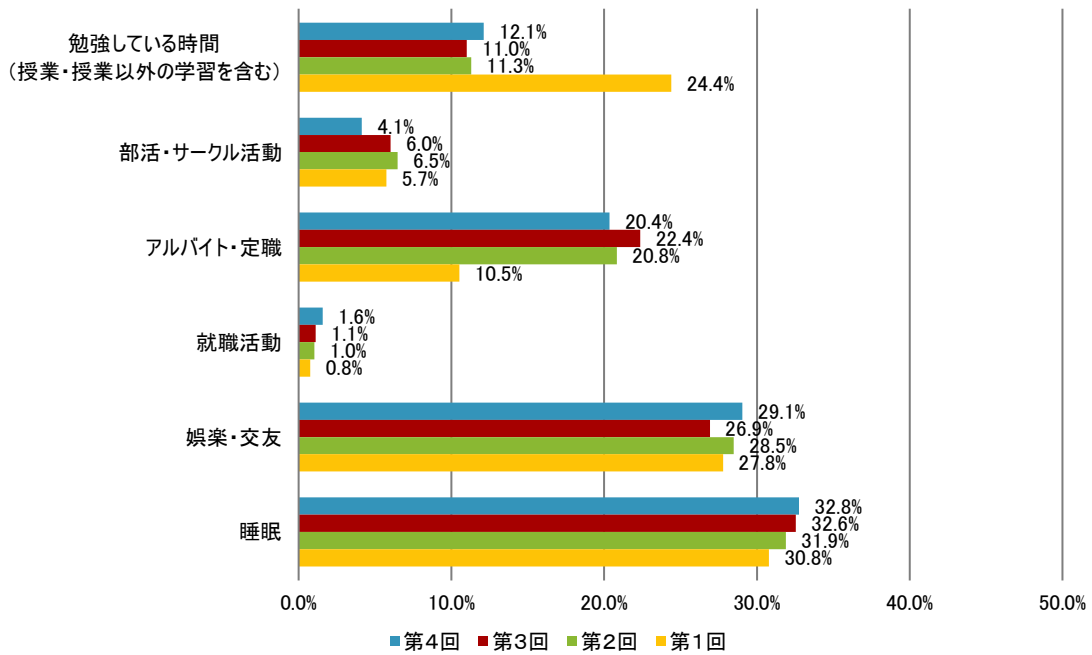


図 2-9：勉強している時間

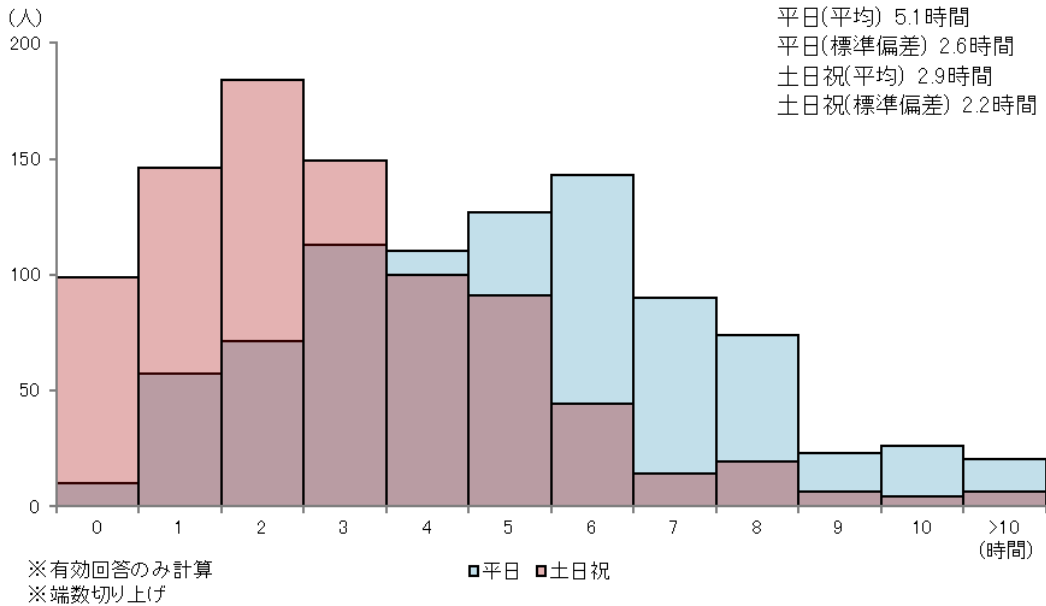


図 2-10 : 部活・サークル活動

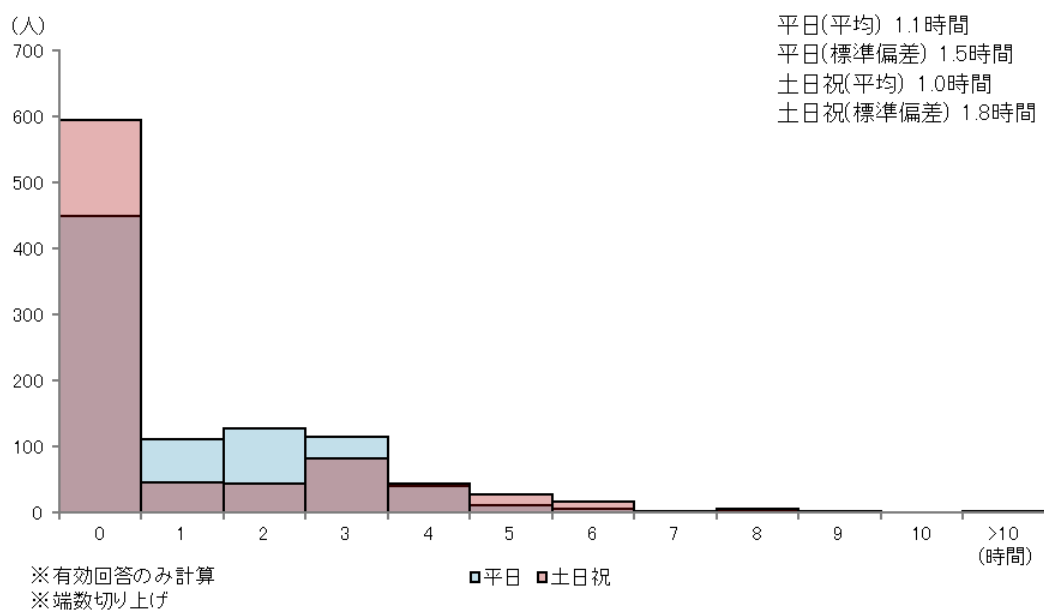


図 2-11 : アルバイト・定職

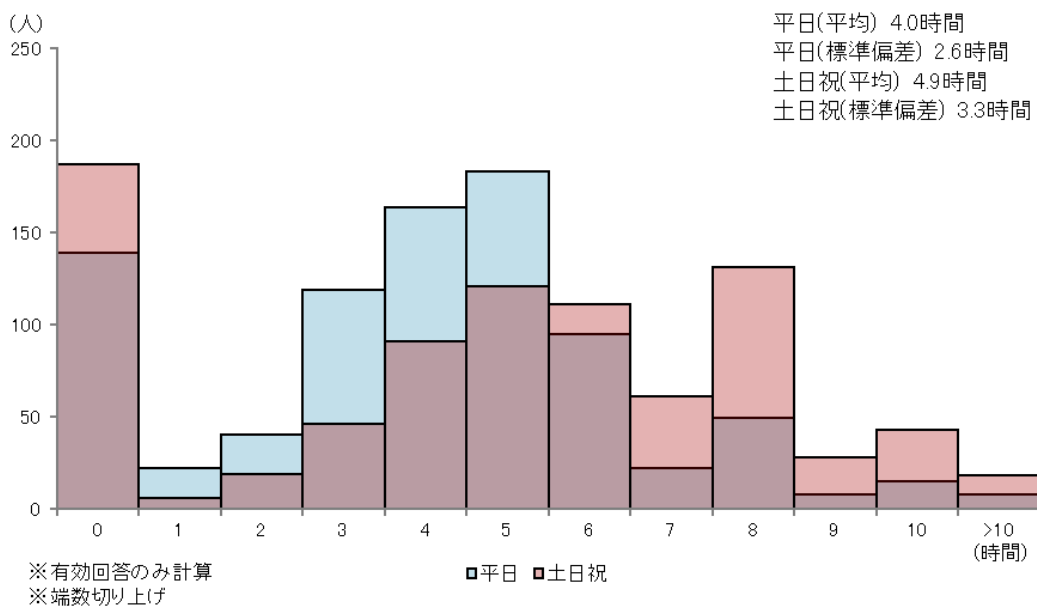


図 2-12：就職活動

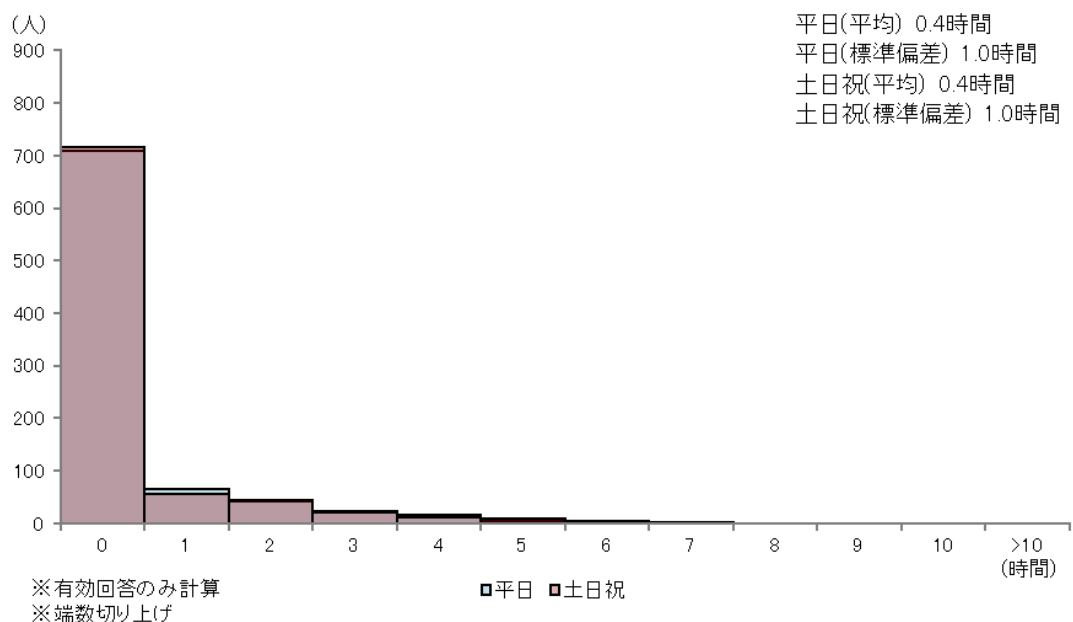


図 2-13：娯楽・交友

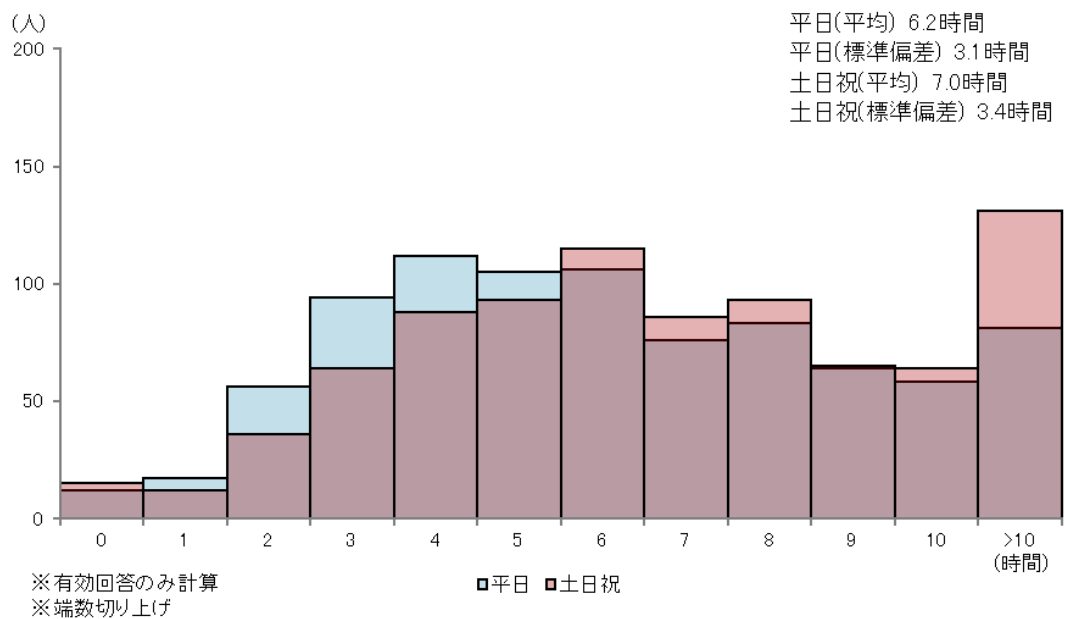
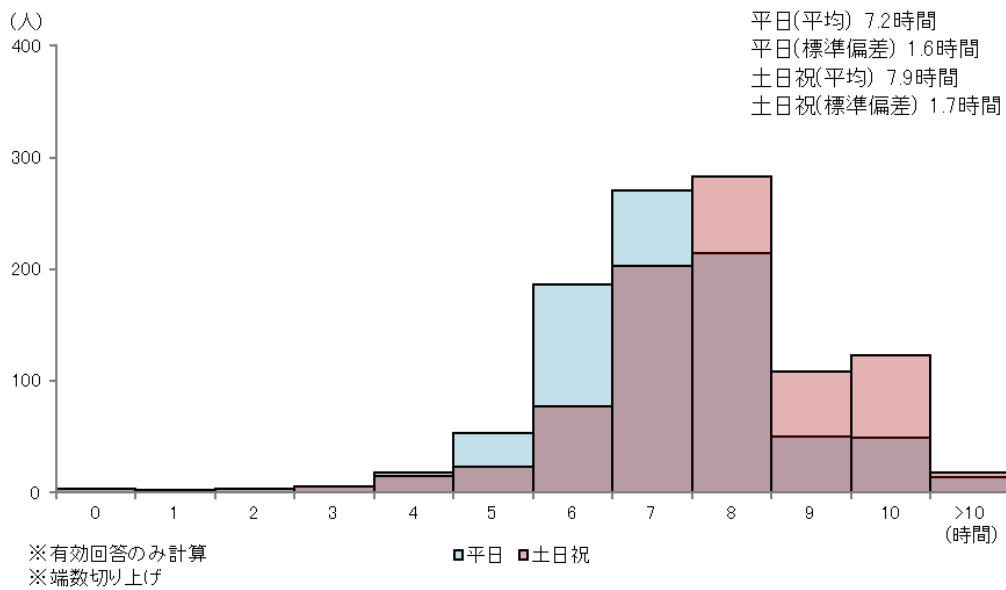


図 2-14：睡眠



### 2.1.2 学生生活の（主観的）成果

大学生活でこれまで身に付いたと実感できることについて、項目ごとにどの程度当てはまっているかを質問した。図 2-15 の数字は「そう思う」と「ややそう思う」の合計である。

全学年で見た場合、回答者の過半数以上が「身に付いた」と答えた項目は、

- 「(C) 幅広い知識ともの見方」 (72.6%)
- 「(A) 外国語の本を読んだり、外国語で話をする力」 (71.0%)
- 「(B) 専門分野での知識・理解」 (70.4%)
- 「(G) ものごとを分析的・批判的に考える力」 (58.8%)
- 「(H) 問題を見つけ、解決方法を考える力」 (50.5%)

である。反対に、「身に付いた」と答えた人が過半数を下回った項目は、

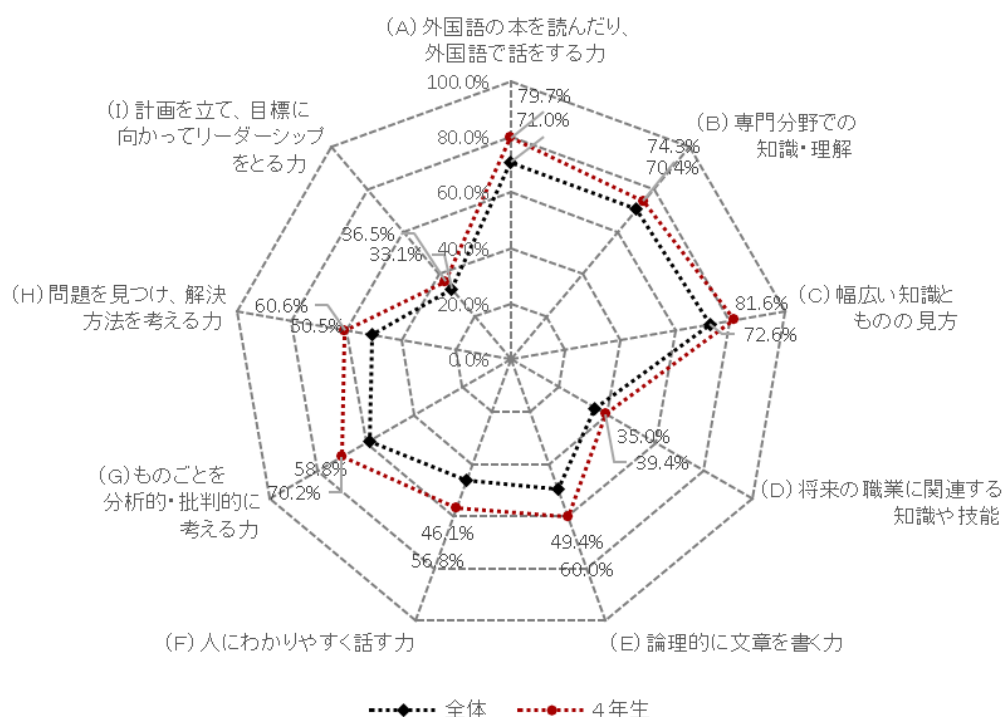
- 「(E) 論理的に文章を書く力」 (49.4%)
- 「(F) 人にわかりやすく話す力」 (46.1%)
- 「(D) 将来の職業に関連する知識や技能」 (35.0%)
- 「(I) 計画を立て、目標に向かってリーダーシップをとる力」 (33.1%)

である。このなかで「(H) 問題を見つけ、解決方法を考える力」を「身に付いた」とする割合が今回の調査において過半数に転じた。

また、4年生に限定して見た場合、全ての項目において全学年の数値を上回っていた。その中でも 10%以上値が大きくなっている数値は下記の通りである。

「(G) ものごとを分析的・批判的に考える力」	(70.2%)
「(H) 問題を見つけ、解決方法を考える力」	(60.6%)
「(E) 論理的に文章を書く力」	(60.0%)
「(F) 人にわかりやすく話す力」	(56.8%)

図 2-15 : 学生生活の (主観的) 成果

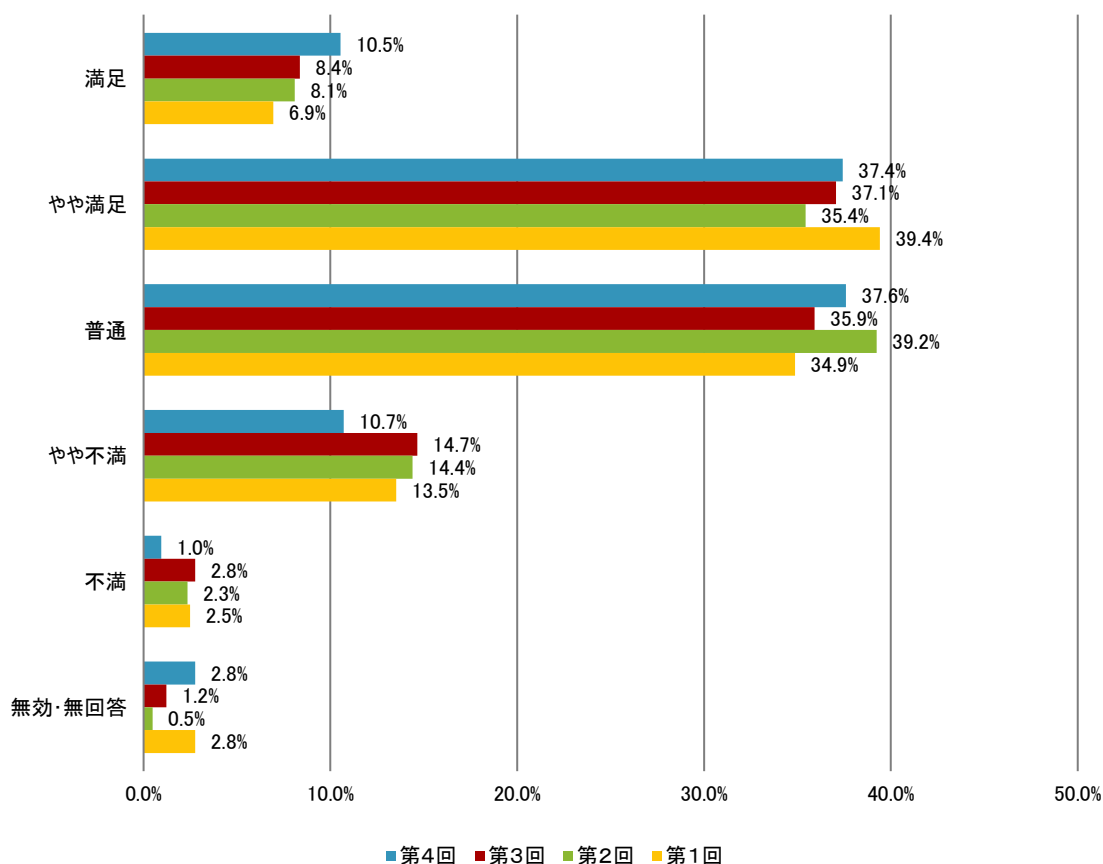


## 2.2 個別活動 (成果教育と学習環境)

### 2.2.1 正課教育

授業を全般的に評価すると、肯定的評価(「満足」と「やや満足」の合計)は 47.9%、否定的評価(「不満」と「やや不満」の合計)は 11.7%である。第 1 回から第 3 回の調査ではそれぞれ肯定的評価は 46.3%、43.5%、45.5%、否定的評価は 16.0%、16.7%、17.5%である。(図 2-16)。

図 2-16：全科目の総合評価



### 2.2.2 図書館

図書館に対する評価では、肯定的評価が 71.8%、否定的評価 7.2%である。第 3 回では肯定的評価 72.2%、否定的評価 8.5%である。第 2 回では肯定的評価 70.4%、否定的評価 9.9%、第 1 回では肯定的評価 63.1%、否定的評価 16.3%だったので、図書館に対する評価は一貫して改善している（図 2-17）。利用頻度は、回答が多い順に、「週に 1～2 回」（39.5%）、「月に 1～2 回」（23.7%）、「ほとんど毎日」（11.1%）である。第 1、2、3 回の結果と分布は変わらないが、「ほとんど毎日」と「週に 1～2 回」以上利用している比率は、調査の回を重ねるごとに減少している（図 2-18）。利用しない理由を訊いた設問では、「利用する時間がない」（34.4%）、「インターネットで情報を入手している」（28.9%）、「必要な資料がない」（11.6%）の順になっている（図 2-19）。

満足度は上がっているものの、利用状況は下がっている。また、利用しない理由として「必要な資料がない」の割合が減少している。



図 2-17：図書館に対する評価

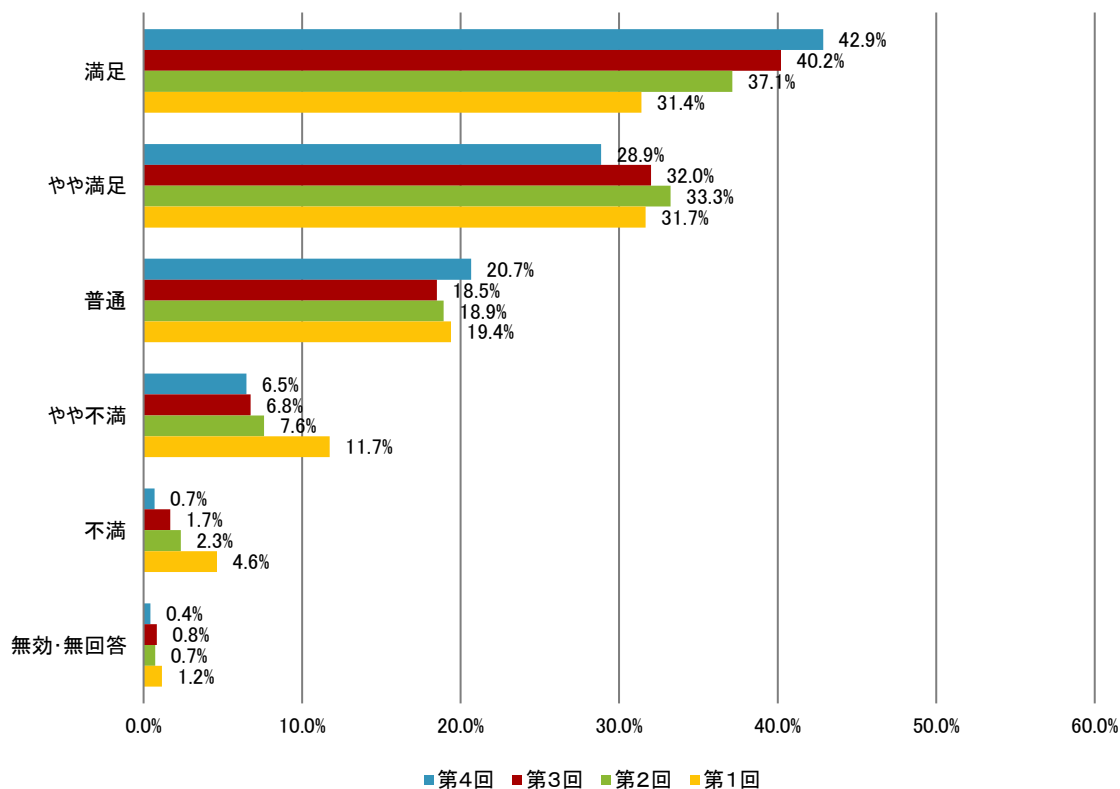


図 2-18：図書館の利用状況

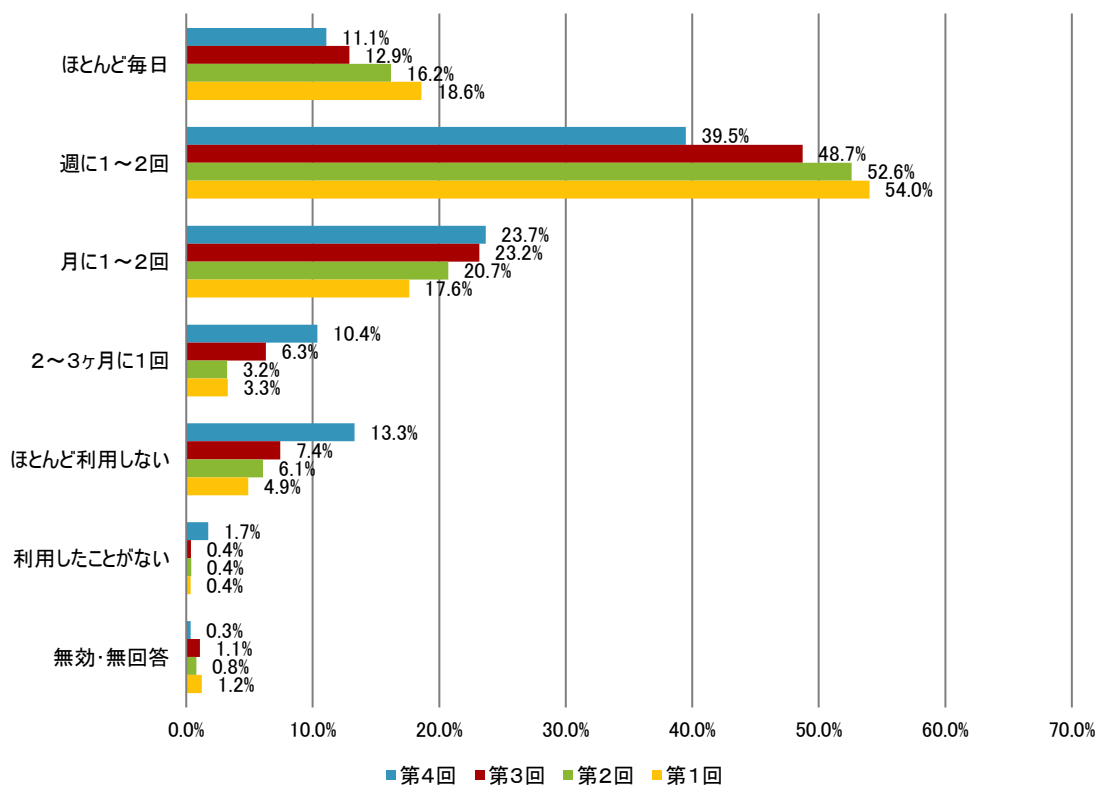
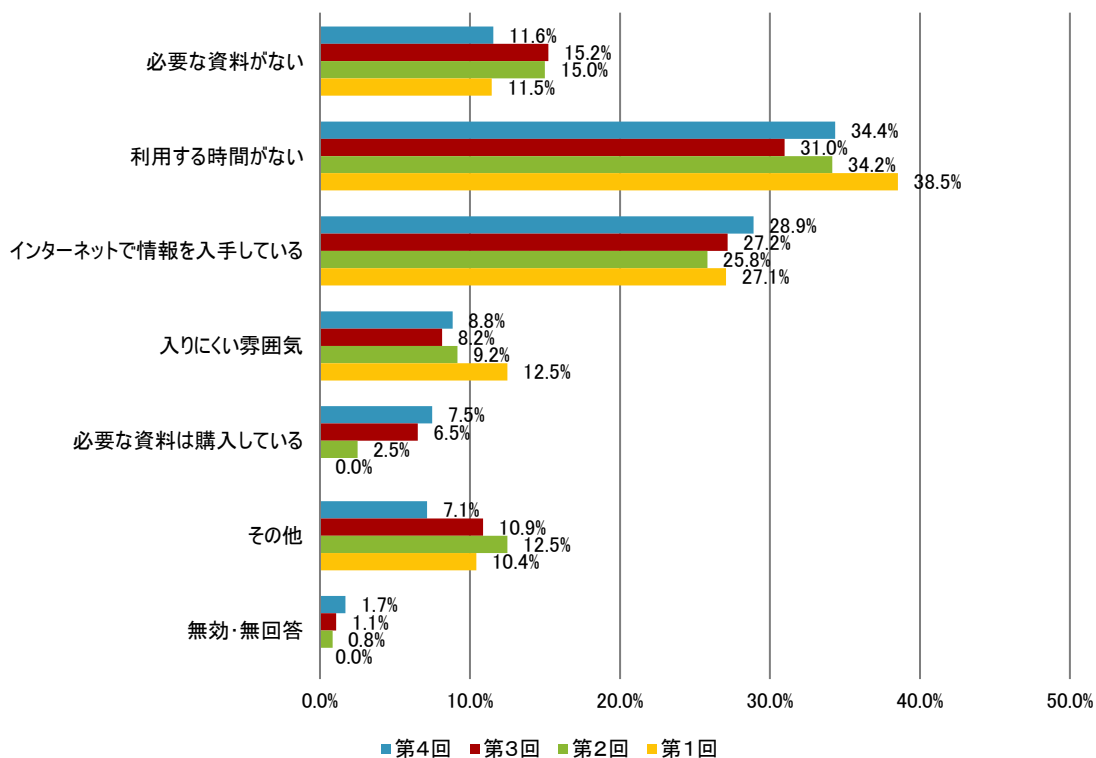


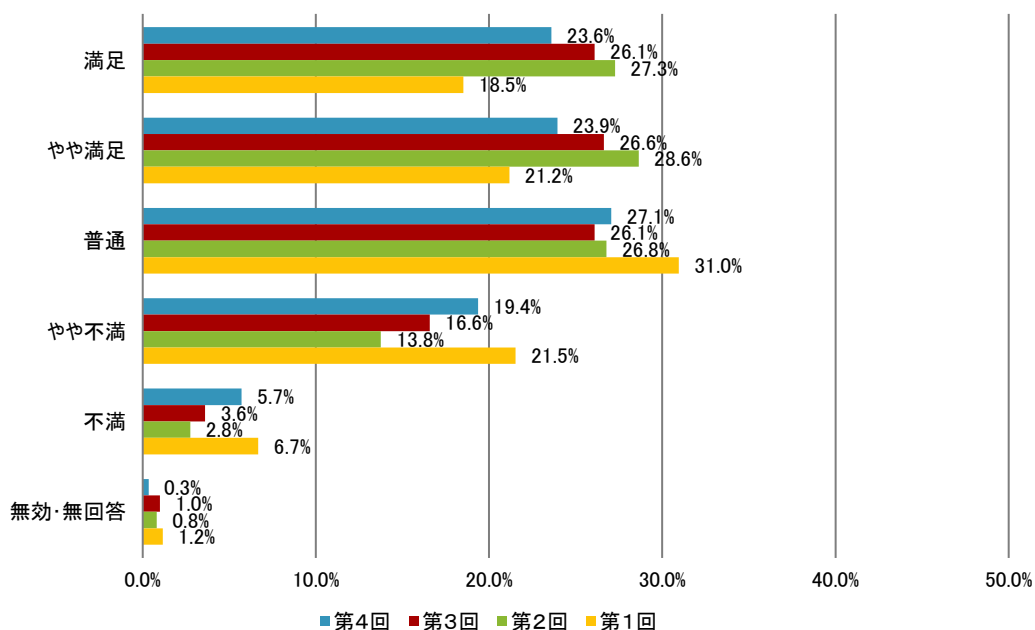
図 2-19：図書館を利用しない理由



### 2.2.3 学習のための施設（教室、自習スペース等）の満足度

学習のための施設に対する評価では、肯定的評価が 47.5%、否定的評価が 25.1%である（図 2-20）。第 3 回調査時よりも肯定的評価は減少し、否定的評価が増加しているが、第 1 回調査と比較して長期的傾向をみれば、改善していると言える。

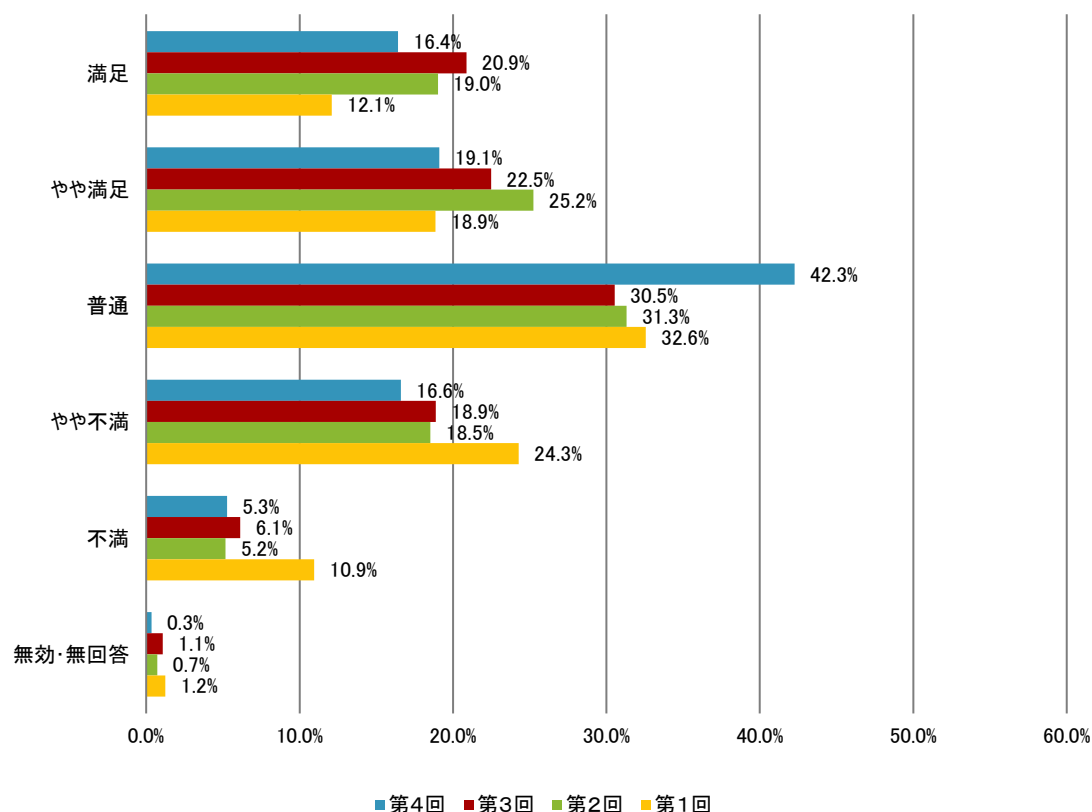
図 2-20：学習のための施設(教室、自習スペース等)の満足度



## 2.2.4 情報機器

情報機器の設備に対する評価では、肯定的評価が 35.5%、否定的評価が 21.9%である（図 2-21）。第 3 回調査よりも満足度が低下しているが、否定的評価も減っている。第 1 回調査と比較して長期的動向をみたとき、大きく改善している状況は維持していると言える。

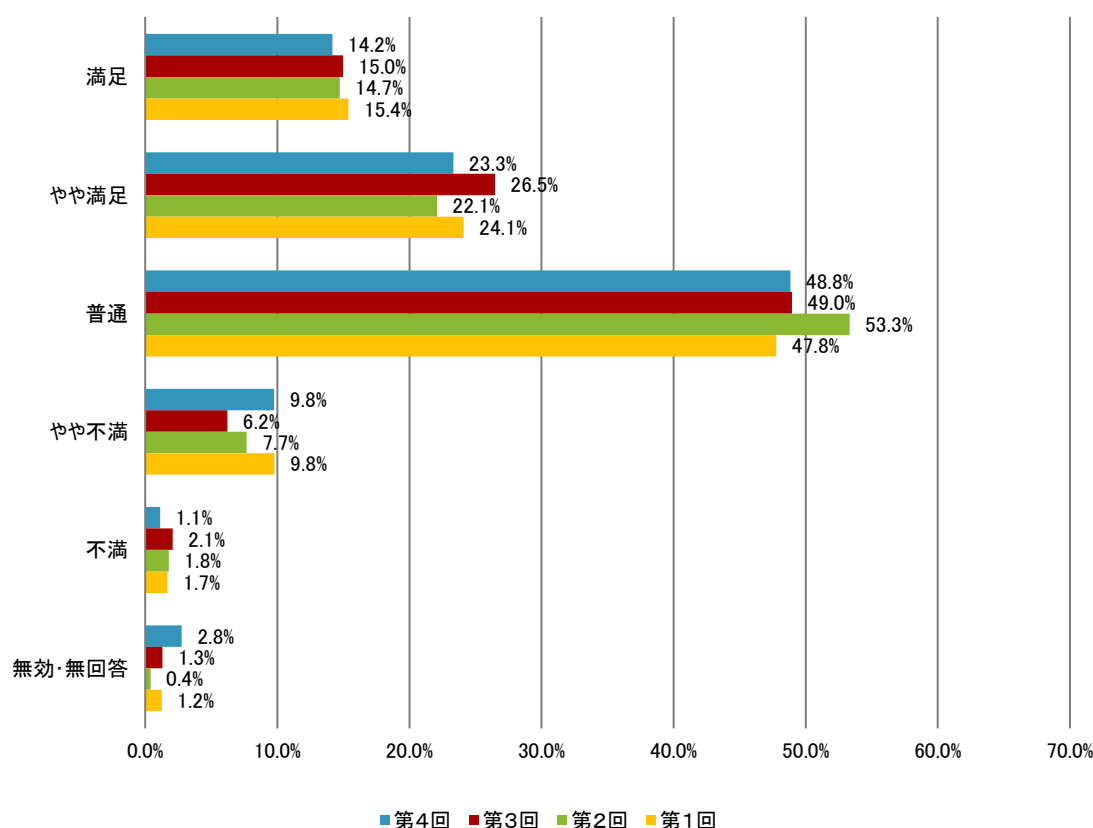
図 2-21： 情報機器等の設備の満足度



## 2.2.5 教員との交流

学習にかかわっている教員との交流の満足度を訊いた設問では、肯定的評価が 37.5%、否定的評価が 10.9%である。第 2 回調査時の肯定的評価 41.5%、否定的評価 8.3%と比較すると、肯定的評価は低下し、否定的評価は増加している。第 1 回調査結果(肯定的評価が 39.5%、否定的評価が 11.5%)に戻りつつある（図 2-22）。

図 2-22：教員との交流の満足度



## 2.3 個別活動（課外活動）

### 2.3.1 部活・サークル活動・ボランティア活動・語劇の状況

課外活動のうち、部活・サークル活動、ボランティア活動、語劇の参加状況を質問した結果は以下の通りである。図 2-23 のとおり、現在、何らかの課外活動に参加している学生の割合は 58.4% である。過去の調査では、60.8%（第 1 回）、62.3%（第 2 回）、59.8%（第 3 回）となっており、最も低い水準となっている。特に、積極的に参加している比率は減少傾向にある。これについては新型コロナウイルス感染症流行の影響が大きく関わっていると思われる。

参加している分野は、図 2-24 の通りである。「体育会活動」の割合が最も高く(30.3%)、課外活動の参加目的としては図 2-25 に示されている通り、「学生生活を楽しむ」(67.3%)、「友人を得る」(55.0%)の割合が高くなっている。

図 2-23：課外活動の頻度

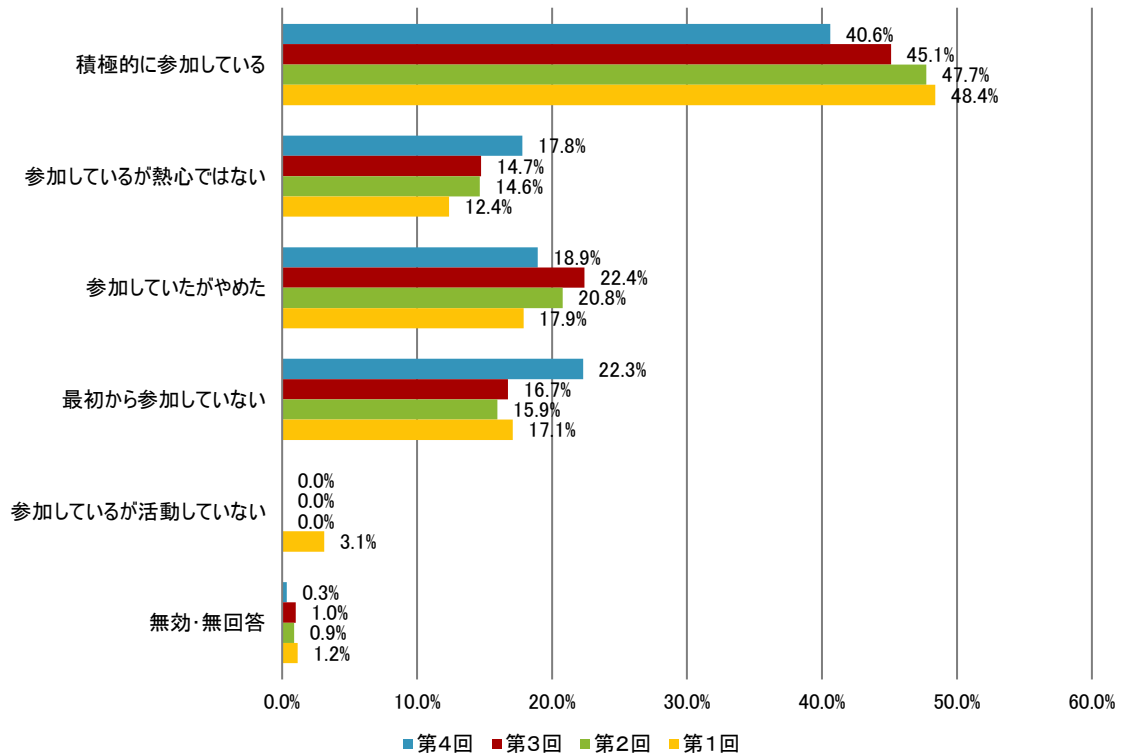


図 2-24：課外活動の分野

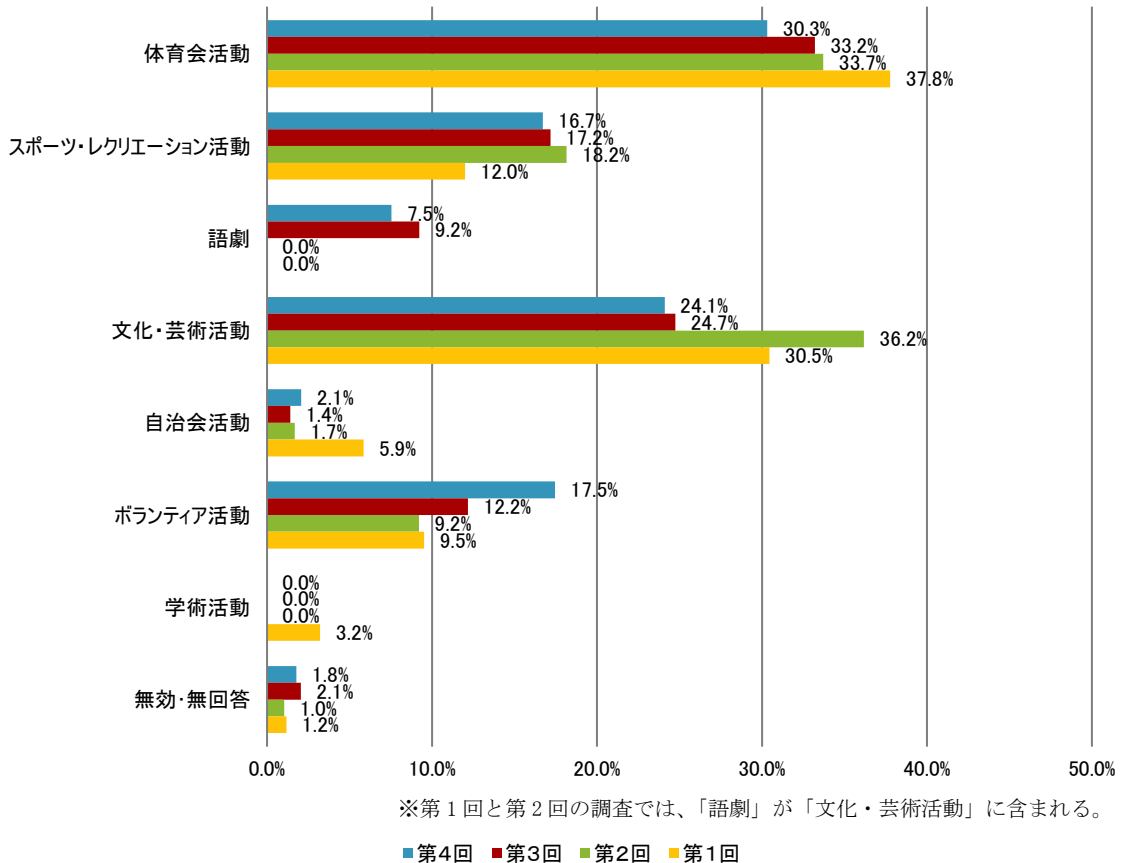
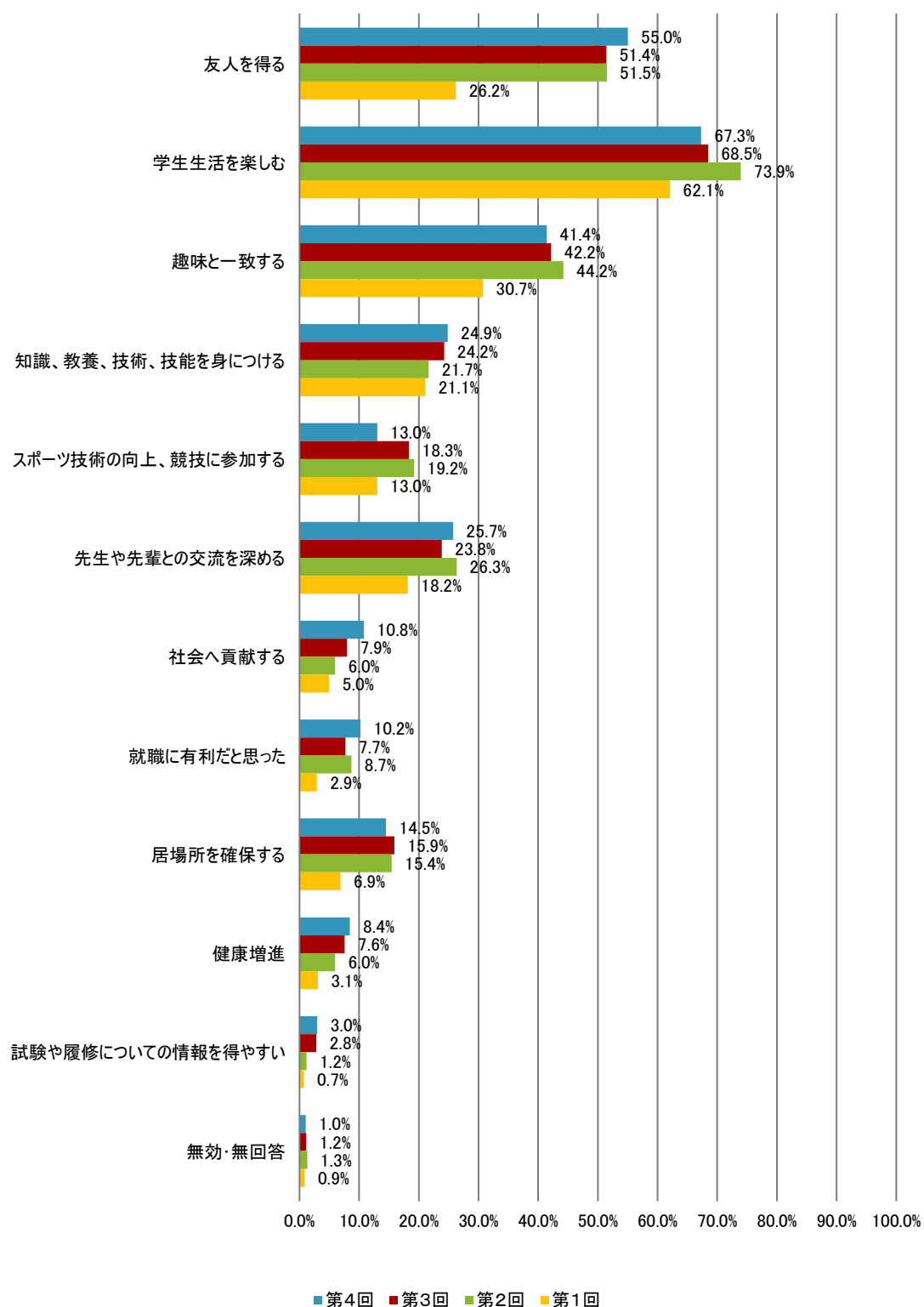


図 2-25：課外活動の参加目的

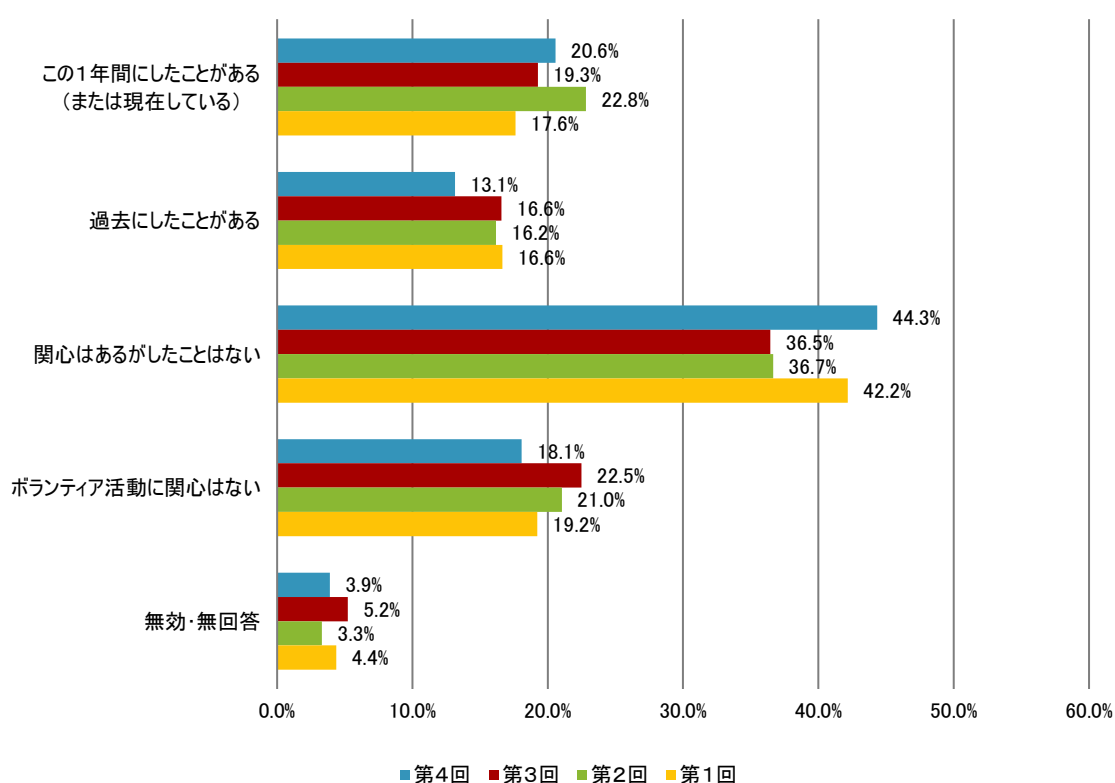


### 2.3.2 ボランティア活動の状況

ボランティア活動に限った状況を見てみると、ボランティア活動の経験がある学生<sup>1</sup>は33.7%であり、過去の調査のなかで最も低い割合だった。新型コロナウイルス感染症流行の影響の可能性は否定できないだろう（図2-26）。

ボランティア活動に関心のある学生<sup>2</sup>に対して、関心のある分野を質問した結果が図2-27である。割合の高い3項目は「外国人対象の国際支援」（64.6%）、「子どもの教育支援」（47.2%）、「環境保護関連」（19.8%）となっている。これまでの調査では、「災害支援・復興支援」が、「環境保護関連」よりも高い割合を示していた。しかし、第4回調査で初めて「環境保護関連」が「災害支援・復興支援」を上回った。

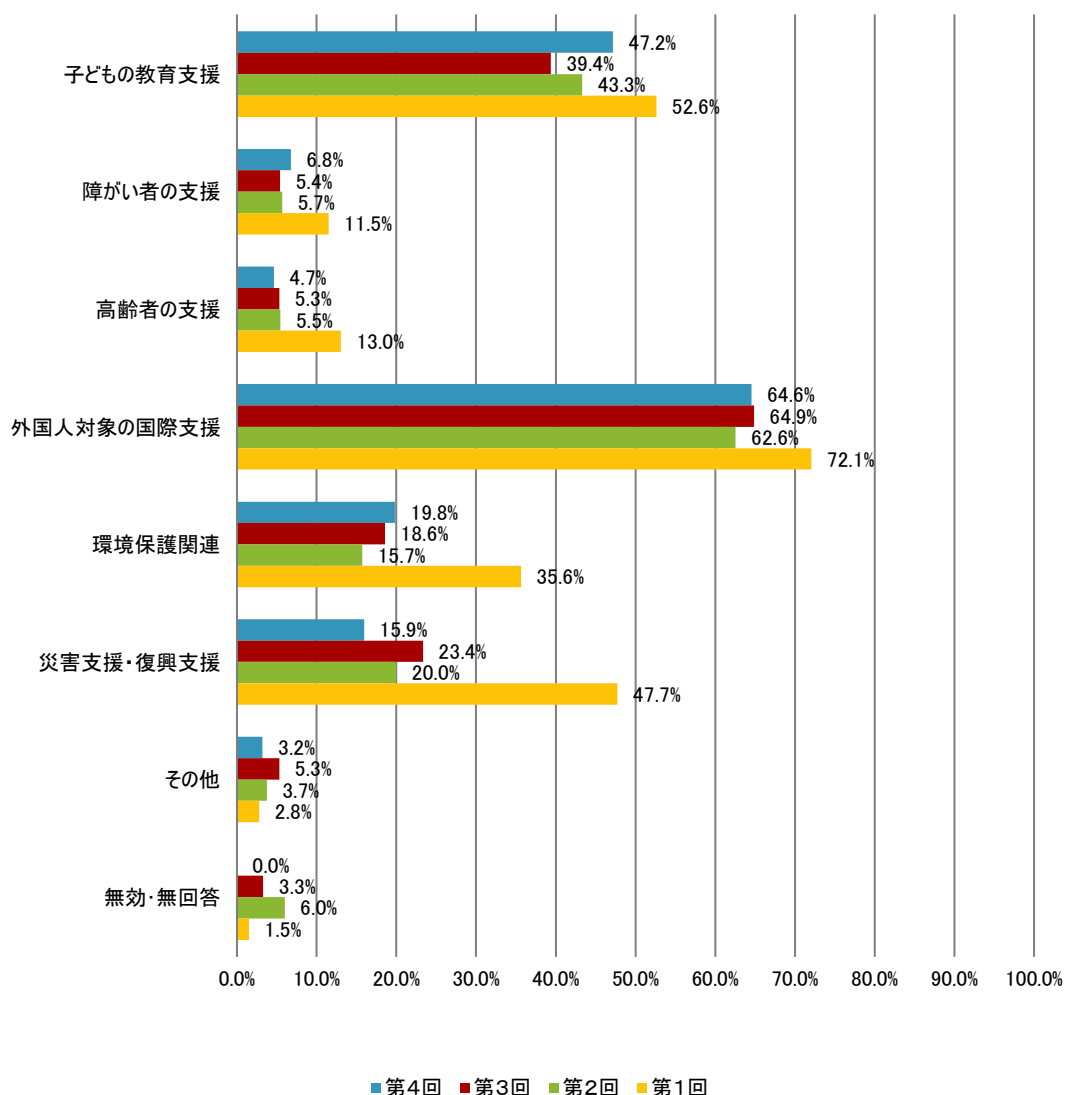
図2-26：入学後のボランティア活動の参加状況



<sup>1</sup> 「この1年間にしたことがある(または現在している)」と「過去にしたことがある」の合計。

<sup>2</sup> 質問(22)において「この1年間にしたことがある(または現在している)」、「過去にしたことがある」、「関心はあるがしたことはない」のいずれかに回答した学生を指す。

図 2-27 : ボランティア活動で関心のある分野



## 2.4 個別活動 (留学)

今回の学生生活調査における留学関連の項目に関しては、新型コロナウイルス感染症の流行に対して国内外で取られた各種対応の影響を受け、多くの項目について経年的変化として判断することが困難である。調査結果の解釈に少なからず影響を与える要因として、特に、本学における渡航留学の停止措置、留学先の国や教育機関における異なる状況が挙げられる。

### 2.4.1 留学 (オンライン含まず) の状況

留学について、状況は図 2-28～30 の通りである。

全体では「留学をしたことがある」が 13.9%、「在学中に留学を検討している」が 42.5%、



「特に留学する予定がない」が42.9%である。第3回調査時と比較すると「留学をしたことがある」の割合は大幅に減少（第3回29.6%→今回13.9%）、対照的に、「特に留学する予定はない」の割合は大幅に増加（第3回27.4%→今回42.9%）、両者とも第1回調査以来の最低値、最高値を示している。「在学中に留学を検討している」の割合は微増である（第3回41.2%→今回42.5%）。学年別推移では、全ての学年で留学者が減少した。留学経験者比率の減少幅は学年が上がるにつれて大きく、4年生での留学経験者比率は32.4%（第3回67.8%）、3年生では17.3%（第3回45.1%）、2年生では3.1%（第3回8.2%）、1年生では1.3%（第3回2.5%）である。

「留学する予定がない」学生にその理由を訊いた結果が図2-30である。割合の高い順に「留学費用が高い」（26.8%）、「その他」（13.7%）、「4年で卒業したい」（11.5%）、「就職活動を優先」（11.3%）、「関心がない」（9.3%）である。「留学費用が高い」が続く第2位の理由を大きく引き離している点は第1回調査以来変わりはない。「留学費用が高い」に次ぐ主要理由として「その他」（第3回調査時10.1%→今回13.7%）および「就職活動を優先」が上位を占めたことは過去の調査に見られない現象であり、「その他」の自由記述の内容からもコロナ禍の影響が窺える。特に「就職活動を優先」は第3回調査時より6%大きく上昇し、また第1回調査時から上昇傾向にある（第1回3.6%、第2回4.0%、第3回5.3% → 今回11.3%）。

図2-28：留学状況

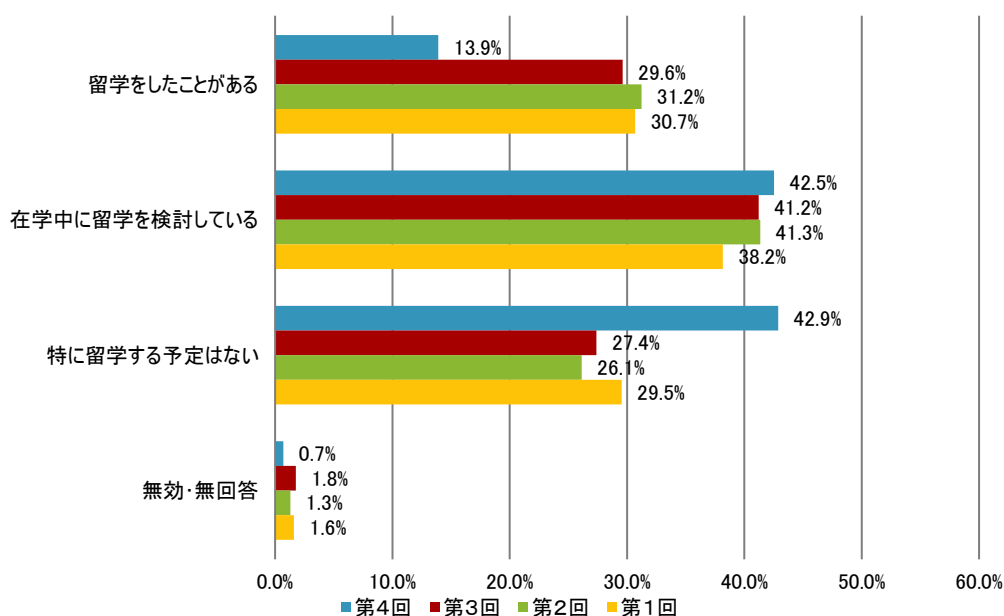


図 2-29：学年別留学状況

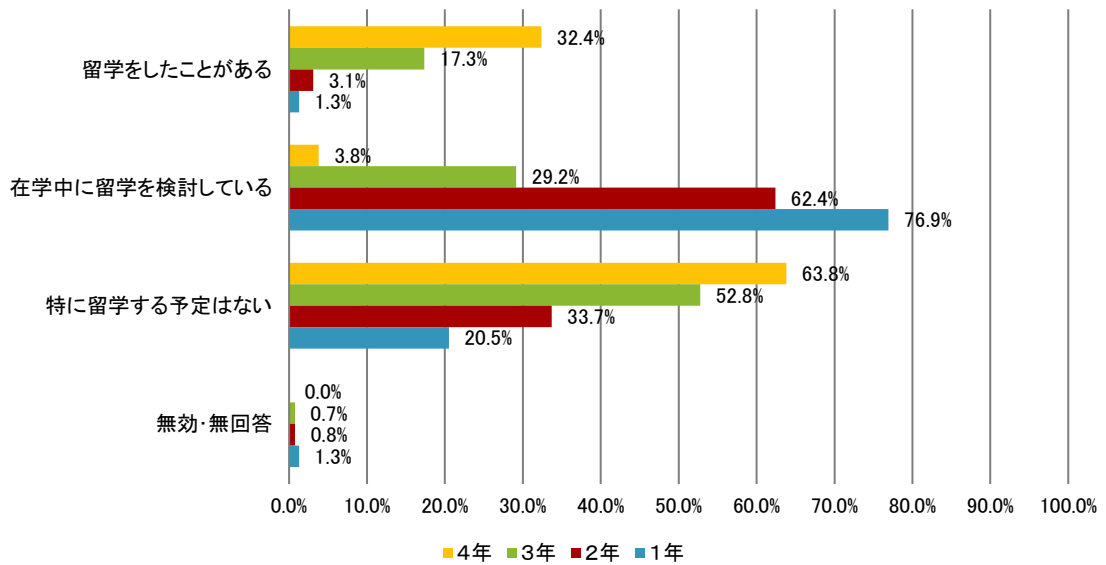
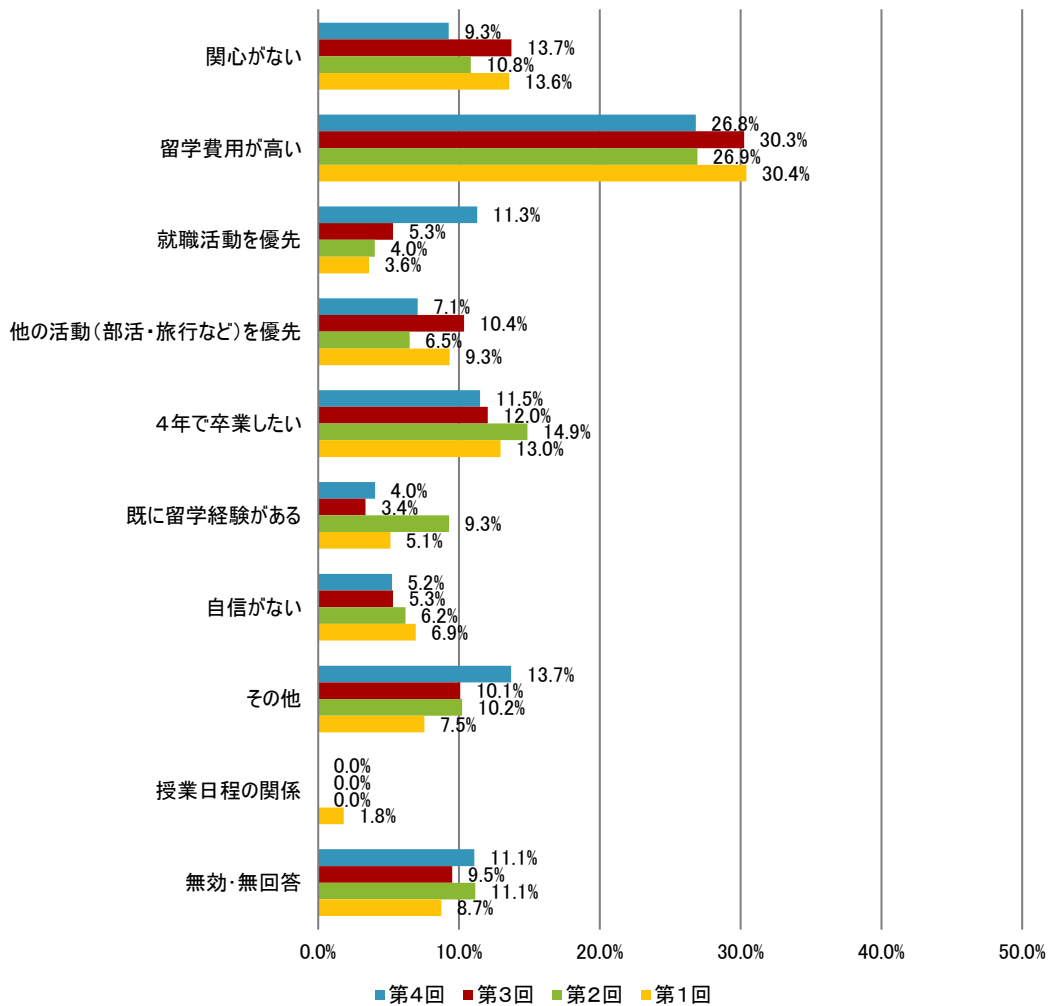


図 2-30：留学を予定していない理由



## 2.4.2 留学の形態

「留学をしたことがある」、「留学を検討している」と回答した学生を対象に、留学の形態について質問した。

まず、留学期間についての結果は図 2-31 から図 2-32 の通りである。「留学をしたことがある」と回答した学生の留学期間（図 2-31）は 3 ヶ月未満（37.3%）が最も多く、6 ヶ月～12 ヶ月未満（34.8%）が続く。第 3 回調査時と比較すると 3 ヶ月未満の留学者が増加し（第 3 回 29.5%→今回 37.3%）、6 ヶ月～12 ヶ月未満の留学者の割合が大幅に減少した（第 3 回 50.5%→今回 34.8%）。「留学を検討している」（図 2-32）学生の留学期間は再び 6 ヶ月～12 ヶ月未満の割合が 48.6%と最も高くなるが、第 3 回調査時の 52.9%と比べると減少し、「3 ヶ月未満」（第 3 回 12.1%→今回 17.1%）および「3 ヶ月～6 ヶ月未満」（第 3 回 14.7%→今回 16.5%）の割合が上昇している。「3 ヶ月未満」の留学期間を検討する学生の増加が傾向的なものであるのか、コロナ禍の影響を受けた学習計画の変更によるものであるかは、現時点では判断が難しい。

次に留学の種類についての結果は図 2-33 の通りである。「休学して留学(語学学校)」が 31.5%と最も高く、「本学派遣留学制度(交換留学、認定留学、スペイン語圏派遣留学、短期派遣留学)」の 27.0%が続く。第 3 回調査時は「本学派遣留学制度(交換留学、長期派遣留学、スペイン語圏派遣留学、短期派遣留学)」の割合が 29.7%、「休学して留学(語学学校)」が 29.6%とほぼ横並びであったのに対し、今回は「休学して留学(語学学校)」が最も高い割合を占めた。「休学して留学(語学学校)」は第 1 回調査時より上昇傾向にある一方で（第 2 回 22.0%、第 3 回 29.6%→今回 31.5%）、「本学派遣留学制度(交換留学、認定留学、スペイン語圏派遣留学、短期派遣留学)」は減少傾向が見られる（第 2 回 34.2%、第 3 回 29.7%→今回 27.0%）。本学の派遣留学制度を利用しない理由（図 2-34）は、割合の高い順に「選抜の基準が厳しすぎる」（32.7%）、「制度を使う必要性を感じなかった」（22.8%）である。第 3 回調査時は、順に「制度を使う必要性を感じなかった」（28.3%）、「選抜の基準が厳しすぎる」（22.8%）であったことから、「選抜の基準が厳しすぎる」（第 3 回 22.8%→今回 32.7%）の理由が大幅に上昇している。尚、図 2-35 の通り、「選抜の基準が厳しすぎる」は英語圏に留学する学生の 3 割が回答する最上位の理由であり、ロシア語圏、中国語圏、スペイン語圏の最上位の理由は「制度を使う必要性を感じなかった」である。

留学先については図 2-36 の通り、英語圏が 66.5%で最も高い。第 3 回調査と比較すると、英語圏は上昇(第 3 回 64.7%→今回 66.5%)、中国語圏（第 3 回 12.1%→今回 9.3%）とロシア語圏（第 3 回 5.6%→今回 4.3%）は減少、スペイン語圏（第 3 回 8.2%→今回 8.9%）は微増である。

留学内容を決めるにあたっての重要な要素としては、図 2-37 の通り、「留学費用」の割合が第 1 回調査時より明らかな上昇傾向にある。一方、これまで緩やかな上昇傾向が見られた「就職活動との関係」は今回減少した。

図 2-31 : 留学の期間（「留学をしたことがある」の回答者）

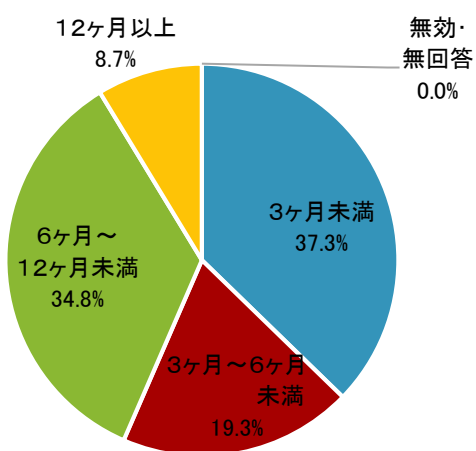


図 2-32 : 留学の期間（「在学中に留学を検討している」の回答者）

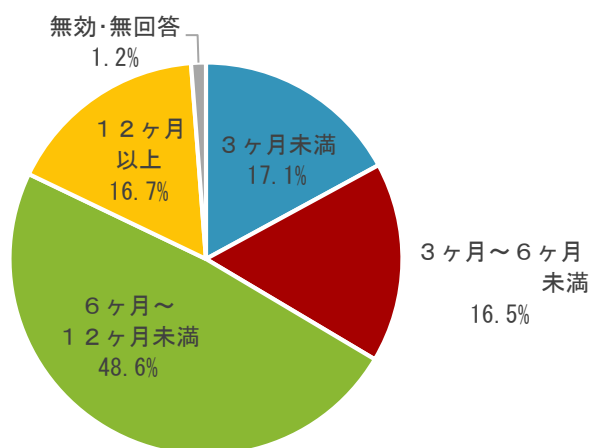


図 2-33：留学の種類

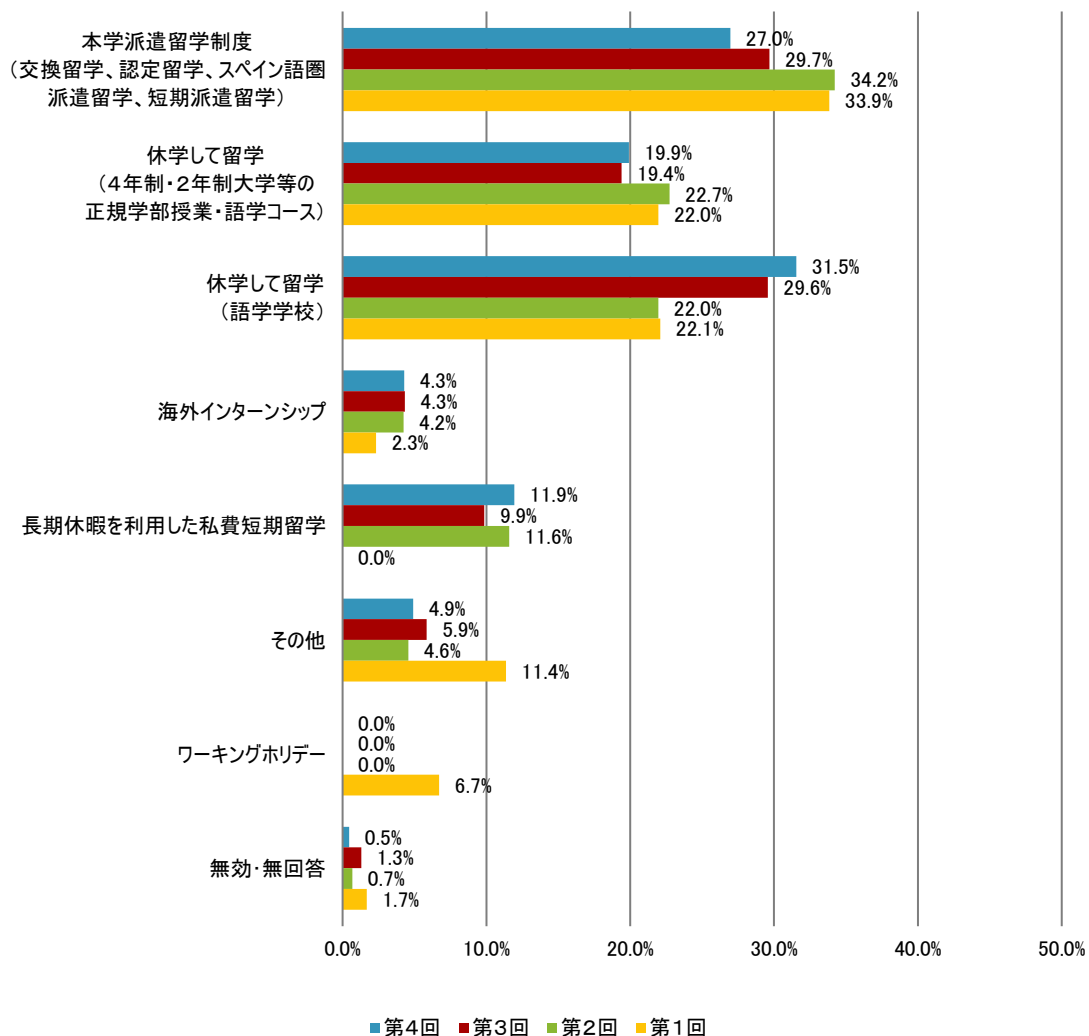


図 2-34：派遣留学制度を利用しない理由

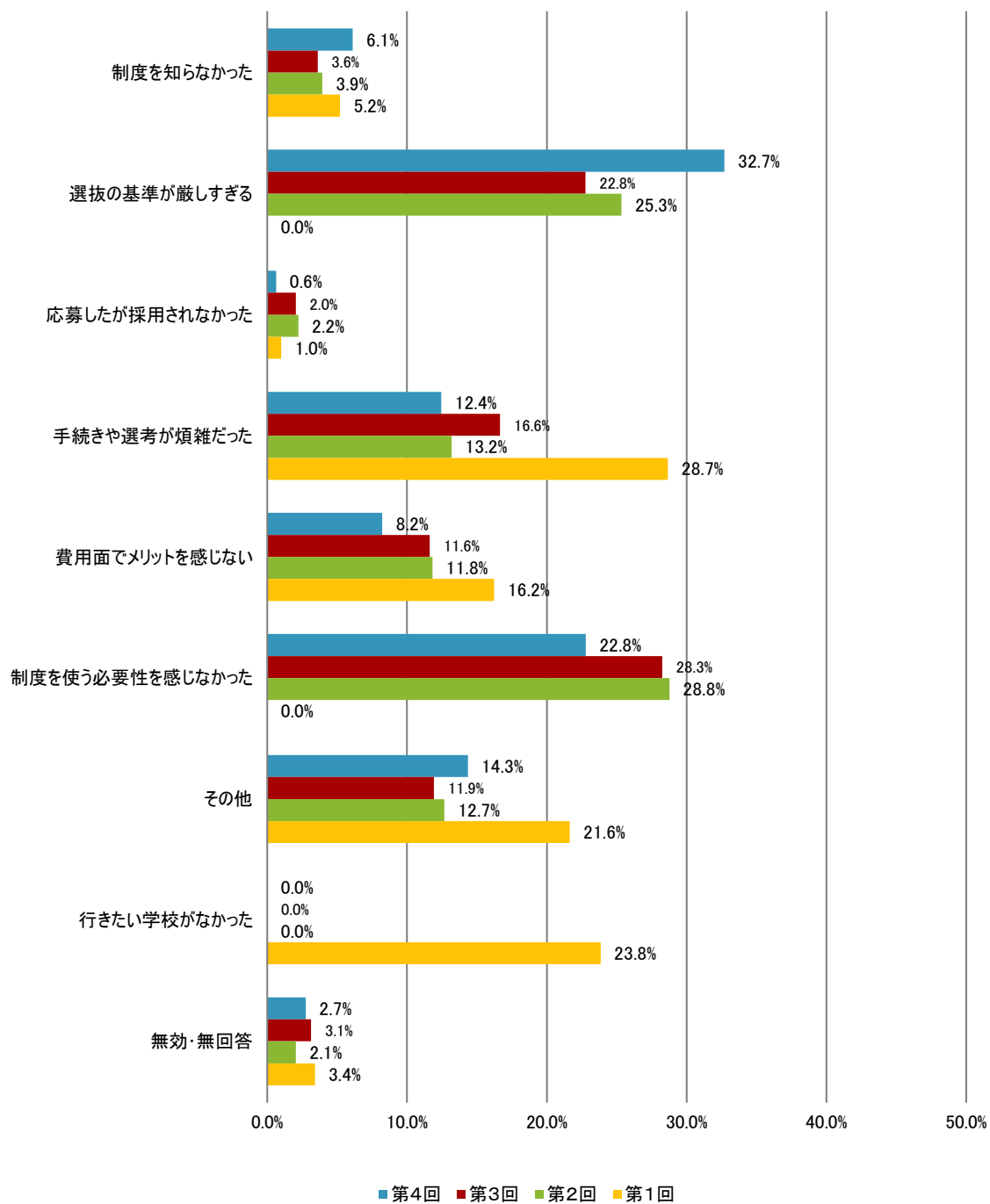


図 2-35：派遣留学制度を利用しない理由（留学先別）

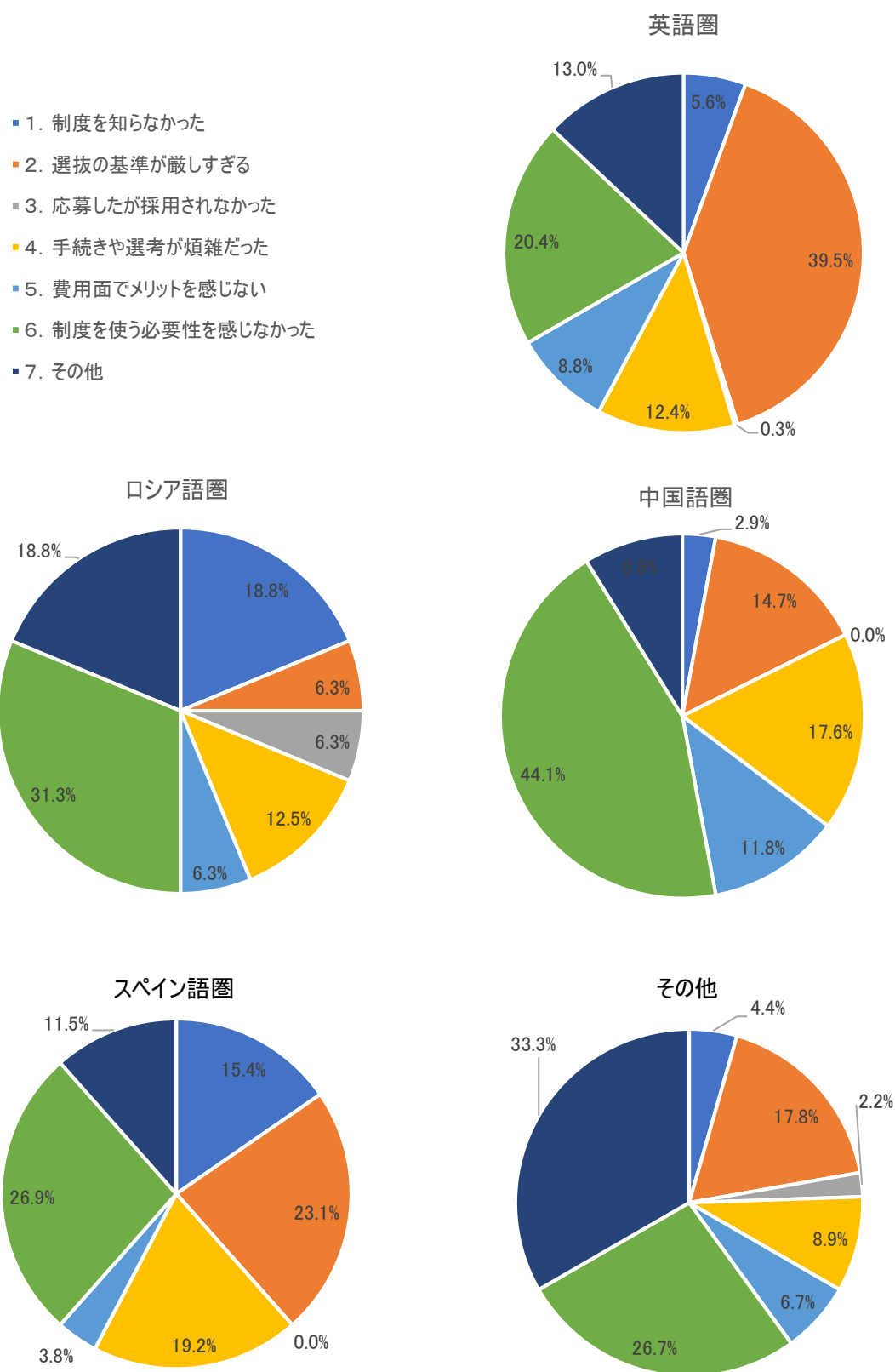


図 2-36：「留学をしたことがある」「留学を予定している」と回答した人の留学先

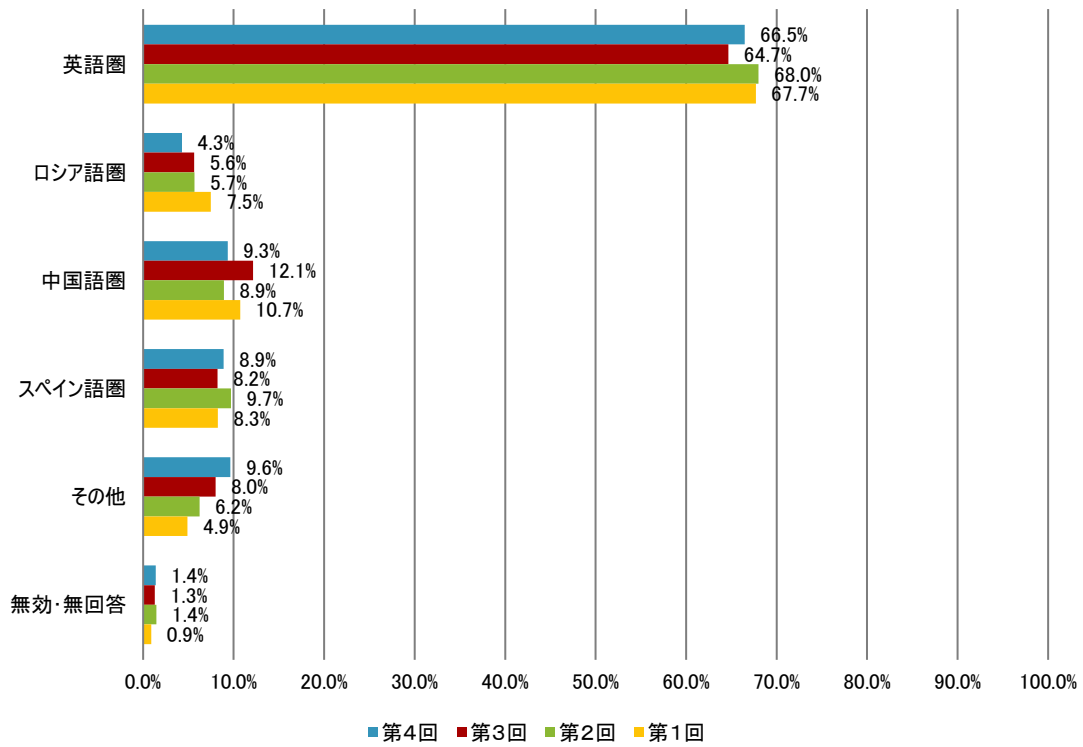
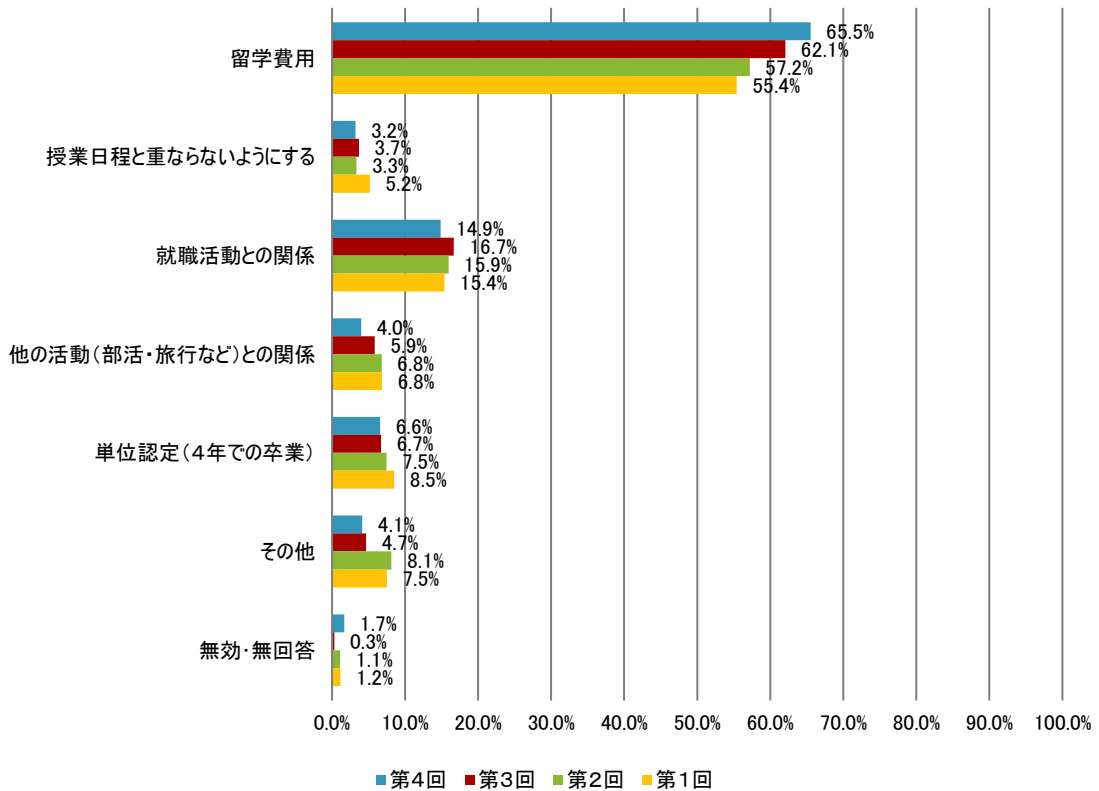


図 2-37：留学内容を決めるにあたって最も重要な要素（全体）





### 2.4.3 オンライン留学の状況

オンライン留学の状況は、図 2-38~40 である。全体で「オンライン留学をしたことがある」が 3.5%、「在学中にオンライン留学を検討している」が 1.0%、両者を合わせても「オンライン留学する予定はない」と回答した学生の 93.6%と大きな開きがある。「オンライン留学する予定がない」学生の主要理由は「渡航して留学したい」(37.8%)と「関心がない」(31.7%)である(図 2-39)。したがって、オンライン留学はコロナ禍で渡航留学が叶わない背景で選択された特殊な事情と考えられる。

「オンライン留学をしたことがある」と回答した学生(40人)の留学期間(図 2-40)は3ヶ月未満(55.0%)が最も多く、6ヶ月~12ヶ月未満(20.0%)、3ヶ月~6ヶ月未満(17.5%)と続く。

図 2-38 : オンライン留学の状況

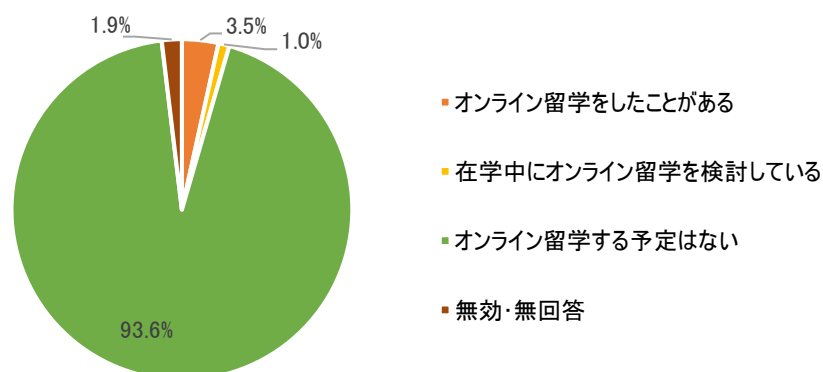


図 2-39 : オンライン留学をしない理由

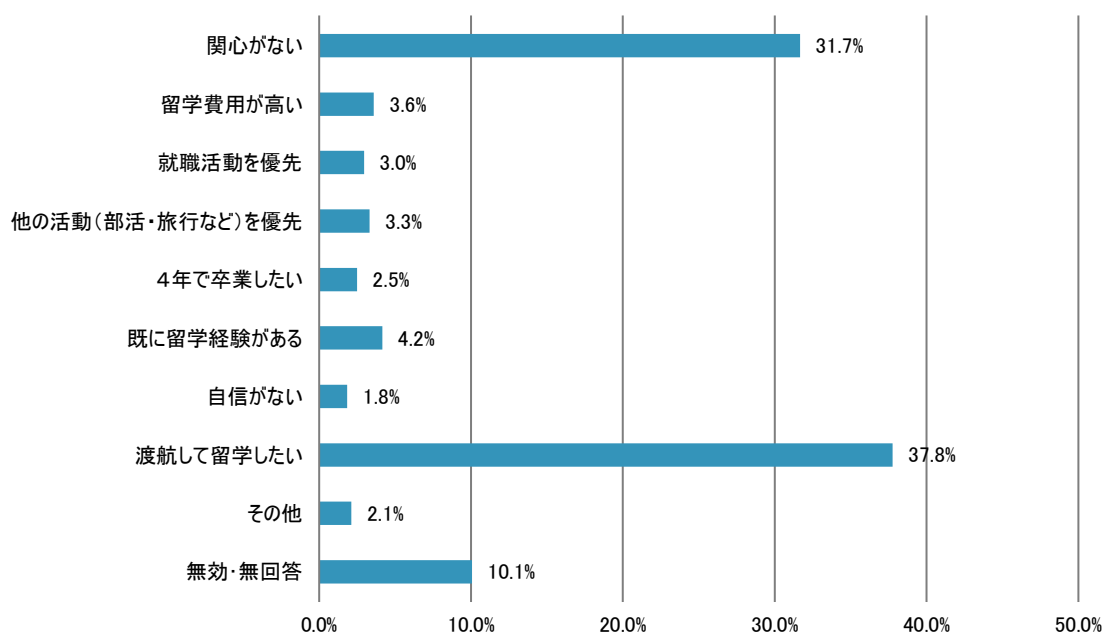
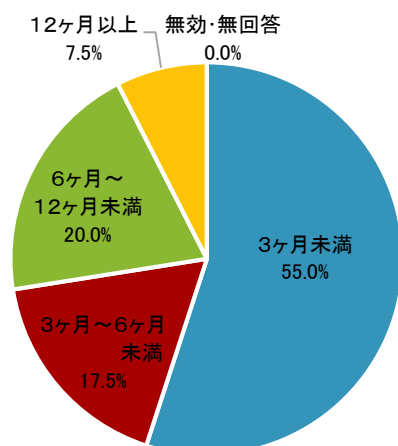


図 2-40：オンライン留学の期間



#### 2.4.4 留学の支援体制について<sup>3</sup>

留学の支援体制について尋ねた。国際交流センターを利用したことが「ある」学生は27.0%、「ない」学生は71.7%である（図2-41）。「ある」学生は当項目が含まれた第2回調査以来、経年的に減少し（第3回36.5% → 今回27.0%）、「ない」学生は経年的に増加している（第3回61.4% → 今回71.7%）。もっとも、今回の調査においては、コロナ禍における渡航留学の停止措置に伴い、平時に比べセンター利用が減少したことも要因のひとつと考えられる。

センターを利用したことがない学生に対して、その理由を尋ねたところ（図2-42）、「知らなかった」（29.7%）、「関心が無い」（25.0%）、「センターに入りにくい」（24.1%）が主要な理由である。うち、「知らなかった」（第3回22.8% → 今回29.7%）と「センターに入りにくい」（第3回22.0% → 今回24.1%）の割合が増加し、「関心が無い」（第3回32.1% → 今回25.0%）は減少した。各理由について経年的傾向はみられない。

国際交流センターを利用したことがある学生の満足度（図2-43）は、割合順に、「満足」「やや満足」を合わせた45.7%、「普通」31.1%、「不満」「やや不満」を合わせた18.0%と並ぶ。「不満」「やや不満」の割合は第1回調査以来の最低値である（第3回18.9% → 今回18.0%）。「不満」「やや不満」と回答した学生の主要理由は、割合順に、「提携校が少ない」（37.3%）、「情報提供が不十分」（28.8%）である（図2-44）。第3回調査時と比較すると、「提携校が少ない」は減少し（第3回40.0% → 今回37.3%）、「情報提供が不十分」は大きく上昇した（第3回22.2% → 今回28.8%）。「情報提供が不十分」の割合が上昇した背景には、コロナ禍における留学環境の情報提供が学生の希望に沿ったものでなかった可能性がある。

<sup>3</sup>（32）国際交流センターでは、留学支援として、留学説明会、提携校の紹介、留学費用の経済支援などを実施しています。これらの支援についてどう思うか教えてください。

図2-41：国際交流センターの利用状況

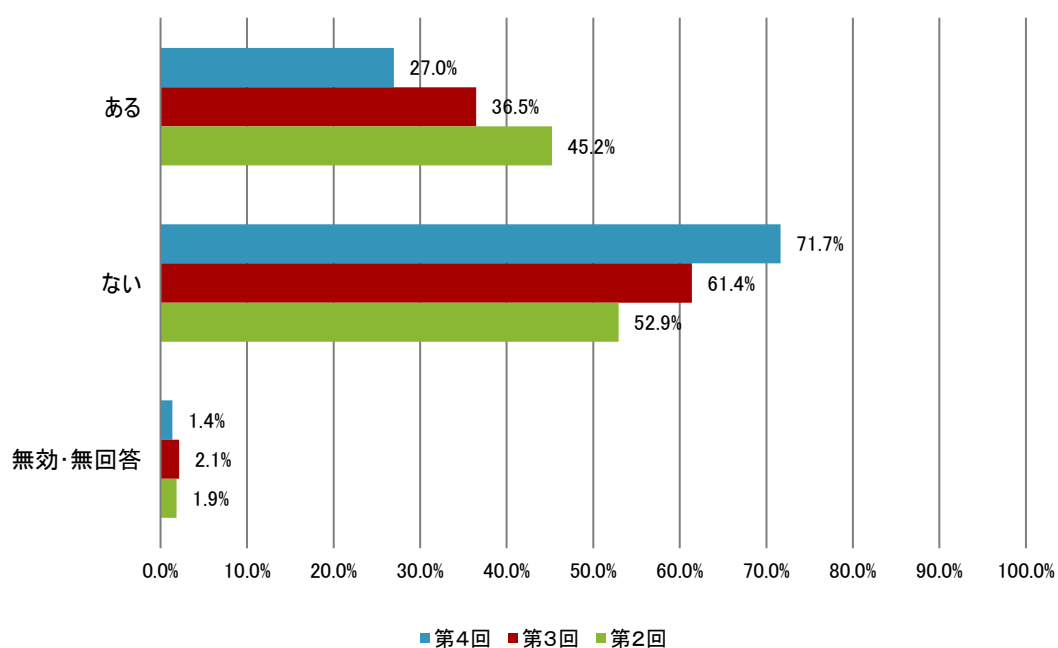


図2-42：国際交流センターを利用しない理由

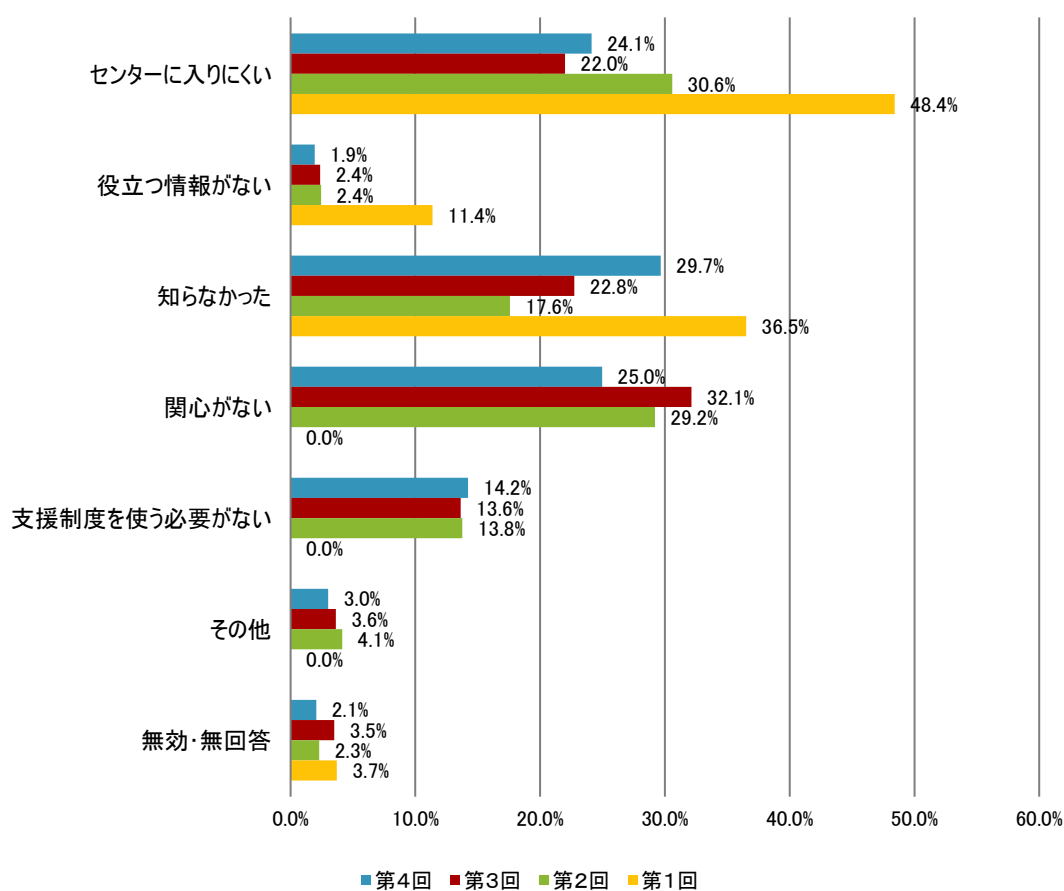
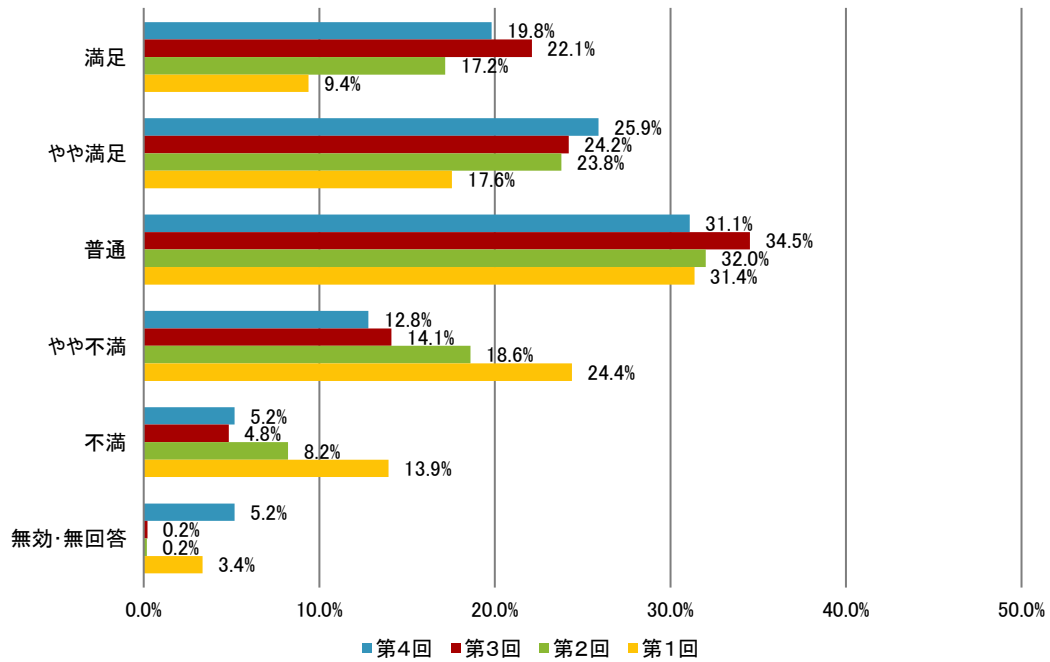
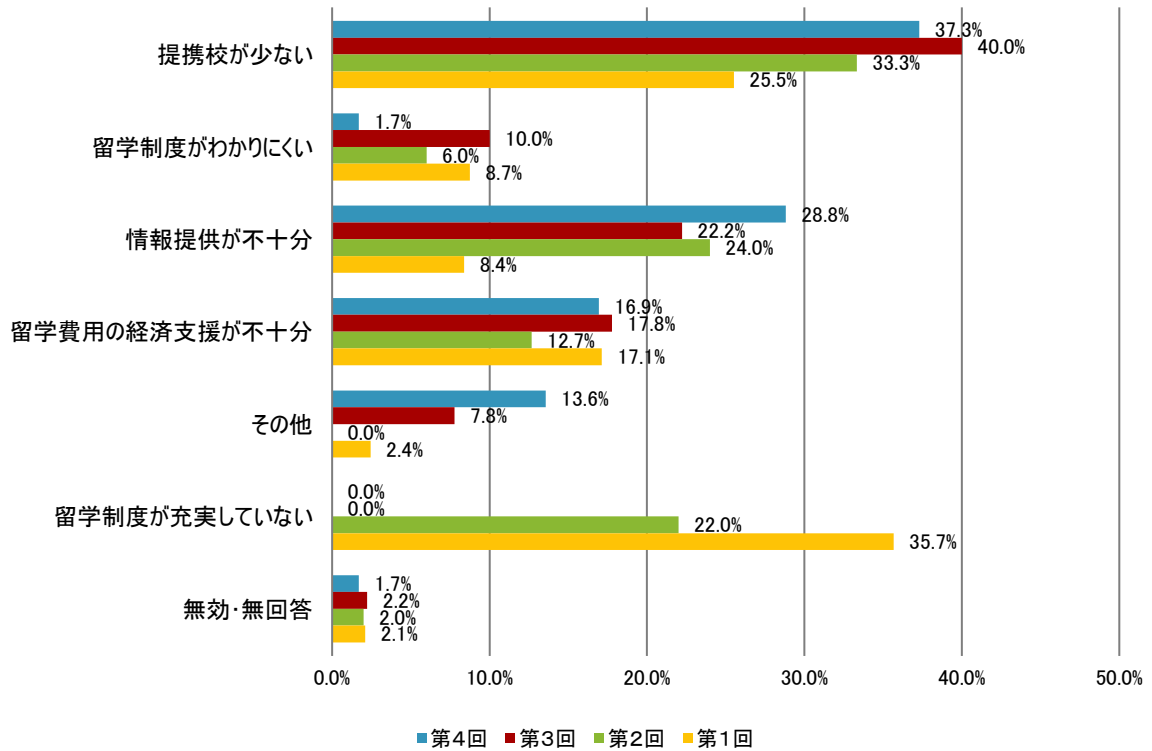


図2-43：国際交流センターの支援の満足度



※ 第1回はすべての学生を対象に調査。当時の回答から再集計を行い算出。上記の選択肢のほか、「利用したことがない」378。

図2-44：支援に不満がある理由



## 2.5 個別活動 (TOEIC、就職活動について)

### 2.5.1 TOEIC

TOEICの受験状況とその得点を質問した。第1回、第2回、第3回と比較した場合、受験者割合は増加している(図2-45)。「受けたことがある」と回答した人の比率は、1年生(60.3%)、2年生(55.4%)、3年生(79.3%)、4年生(86.7%)と増加している(図2-46)。第3回調査時と比較すると、1年生と3年生の受験者率が高くなっている。それ以外の学年の受験者率はさほど変化はみられない。

得点についての結果は、図2-47の通りである。学生全体の平均得点は、第1回、第2回、第3回と比較して増加している(第1回 746.2点、第2回 756.8点、第3回 758.7点、第4回768.3点)。特に3年生、4年生と進級するにしたがい、平均点が順調に上昇していることがみてとれる。

図 2-45 : TOEIC 受験状況

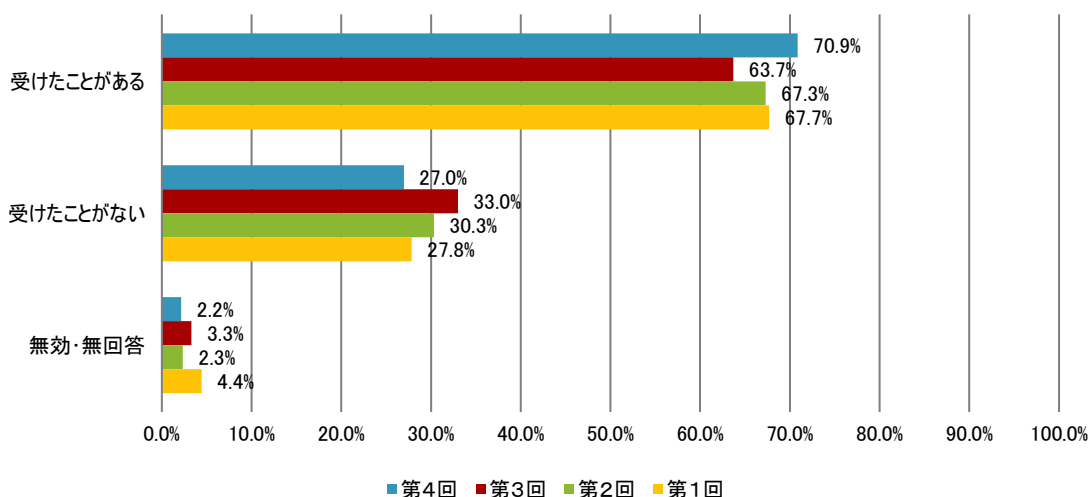


図 2-46 : TOEIC 受験状況 (学年別)

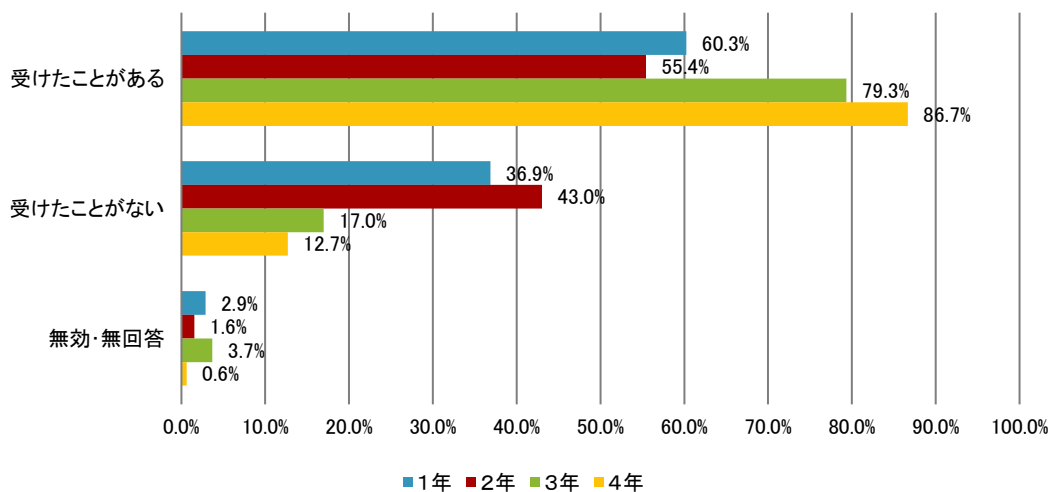
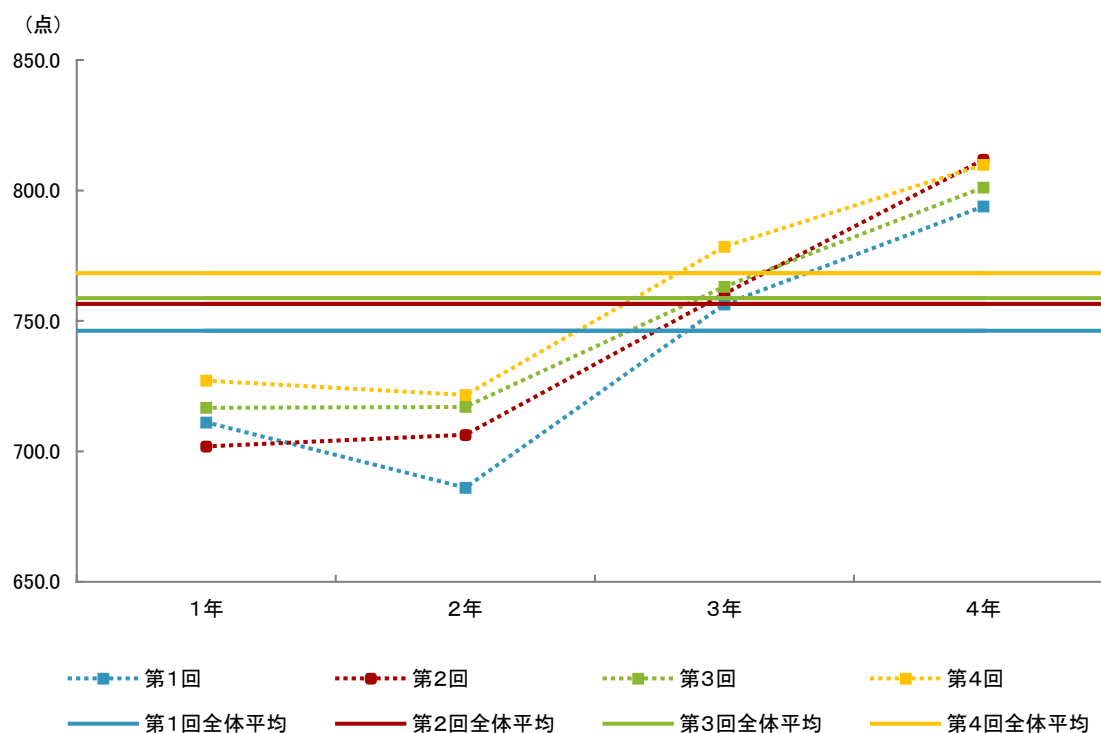


図 2-47： TOEIC 平均得点（学年別）



## 2.5.2 その他の資格試験について

英検（実用英語技能検定試験）の受験状況を質問した。第1回、第2回、第3回と比較した場合、「1級」および「準1級」の受験者割合が合計 31.6%と増加している。（図 2-48）

TOEFL および IELTS の受験状況を質問した。両者について第1回、第2回、第3回と比較した場合、受験者割合は減少している。（図 2-49、図 2-50）

英語以外の諸言語の資格試験の取得状況を質問した。まず、本調査における資格取得者数について、ロシア語の資格取得者はロシア語能力検定 17 人（過去最多）、ТРКИ（ロシア語検定試験）4 人（過去最少）、両者を合算した延べ人数は 21 人で過去の調査と大きな変動はない（図 2-51、図 2-52）。中国語の資格取得者は中国語検定 19 人、HSK（漢語水平考試）82 人（過去最多）、両者を合算した延べ人数は 101 人で過去最多である

（図 2-53、図 2-54）。スペイン語の資格取得者はスペイン語技能検定 10 人（過去最少）、DELE（スペイン語検定試験）7 人（過去最少）、両者を合算した延べ人数は 17 人で過去最少である（図 2-55、図 2-56）。

本調査における資格の種類について、専攻語学 IV 階程相当レベル以上の等級取得者数を合算すると以下ようになる。

ロシア語能力検定 1 級・2 級	5 人
ТРКИ 第 3(C1)・第 2(B2)レベル	2 人（過去最少）

中国語検定 1 級・準 1 級	2 人 (過去最少)
HSK6 級	19 人 (過去最少)
スペイン語技能検定 1 級・2 級	2 人
DELE (スペイン語検定試験) C2・C1・B2 レベル	5 人

図 2-48 : 英検受験状況

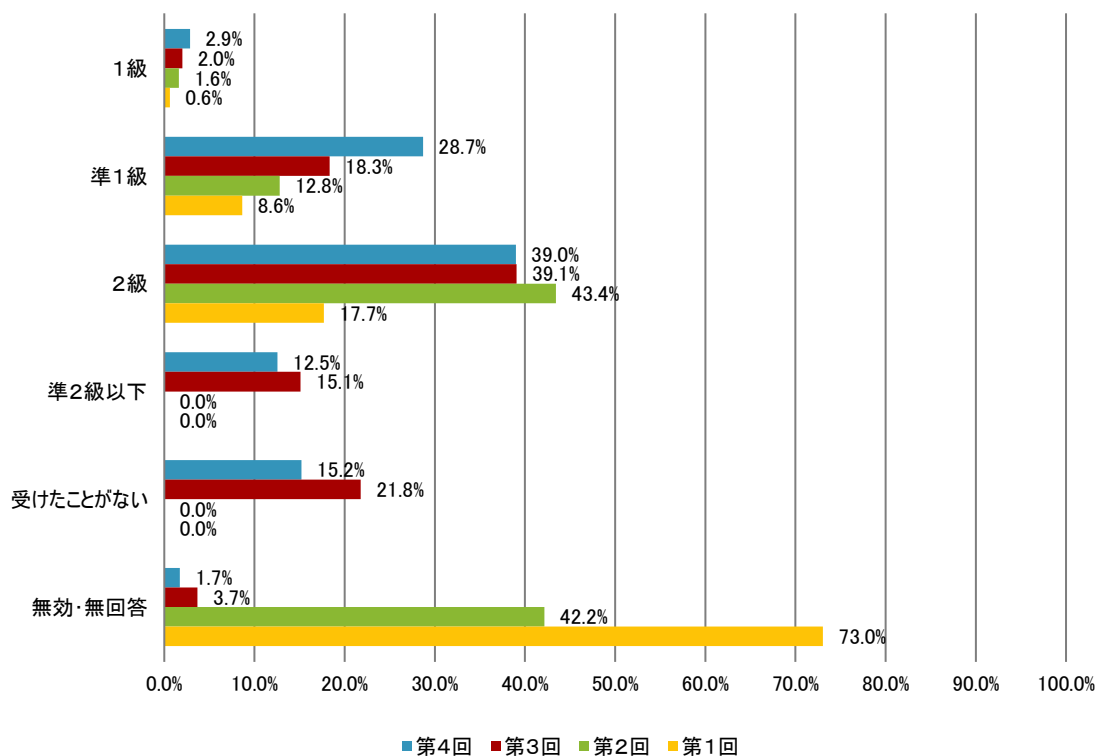


図 2-49 : TOEFL 受験状況

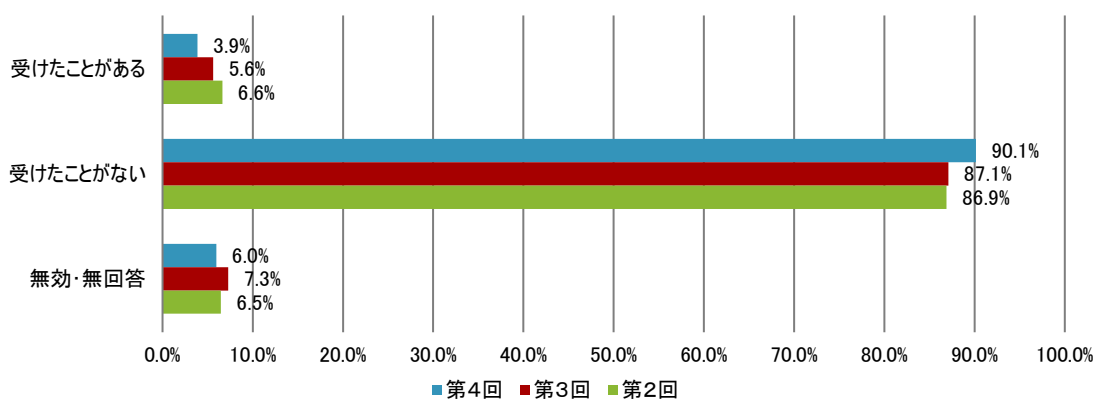


図 2-50 : IELTS 受験状況

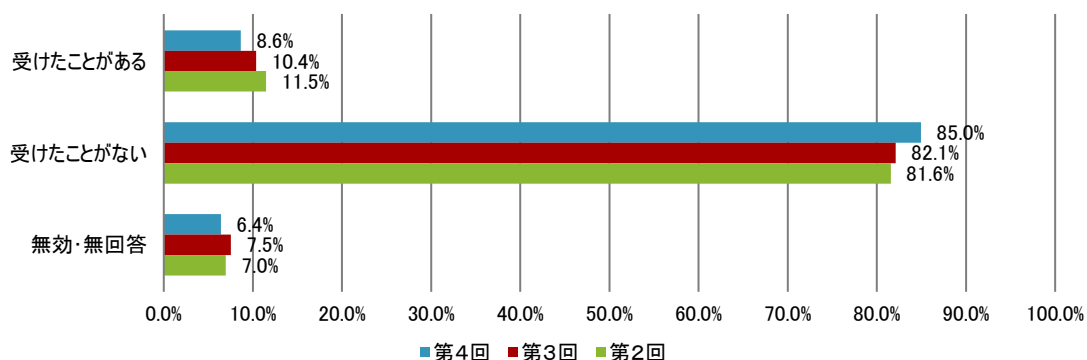


図 2-51 : ロシア語能力検定取得状況

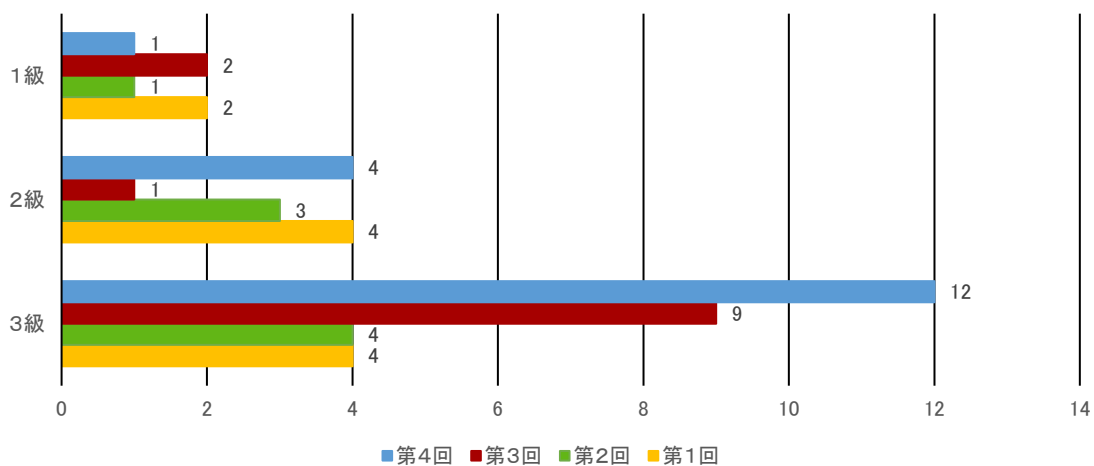


図 2-52 : ТРКИ (ロシア語検定試験) 取得状況

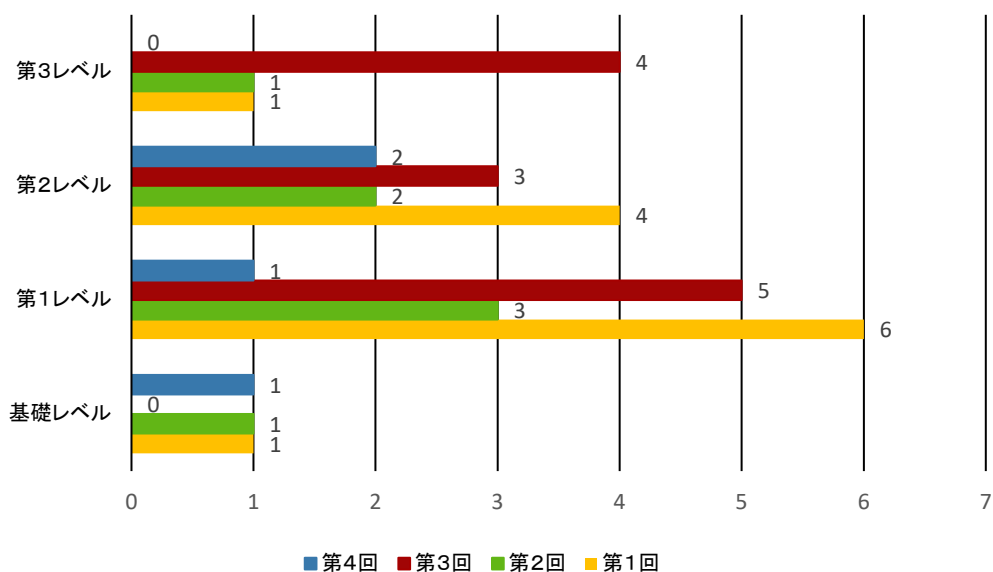




図 2-53 : 中国語検定取得状況

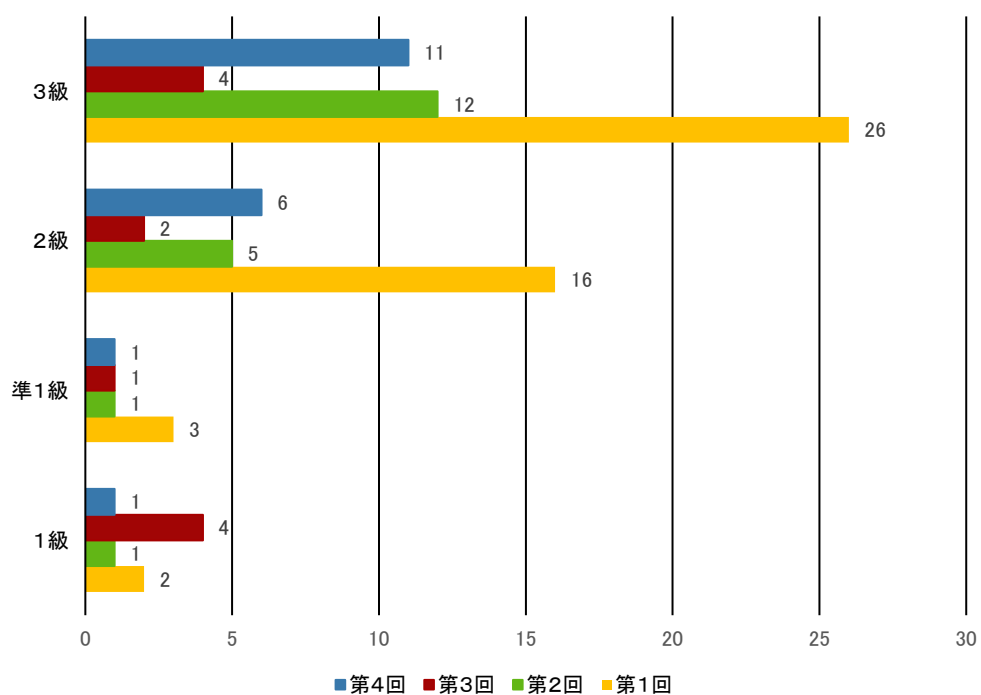


図 2-54 : HSK 取得状況

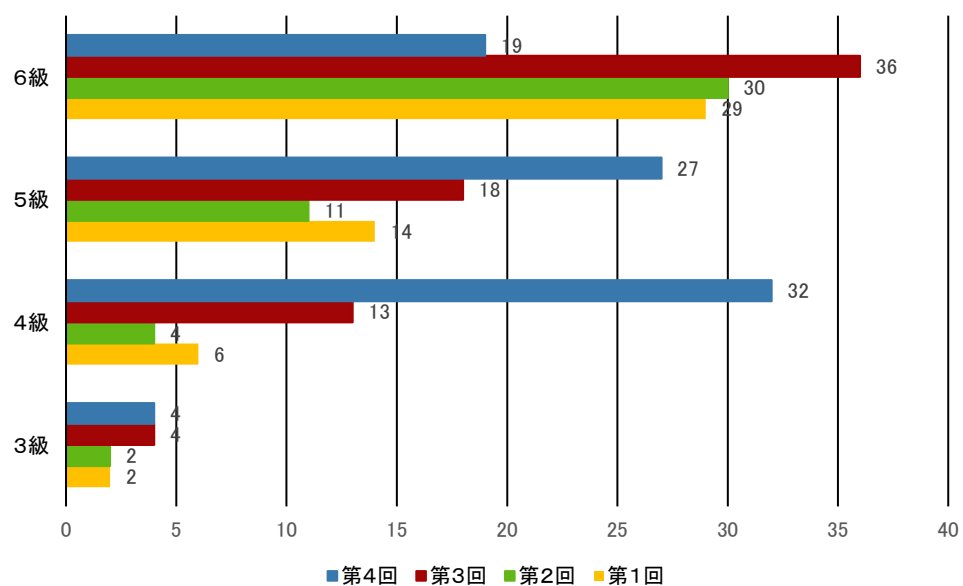


図 2-55 : スペイン語技能検定取得状況

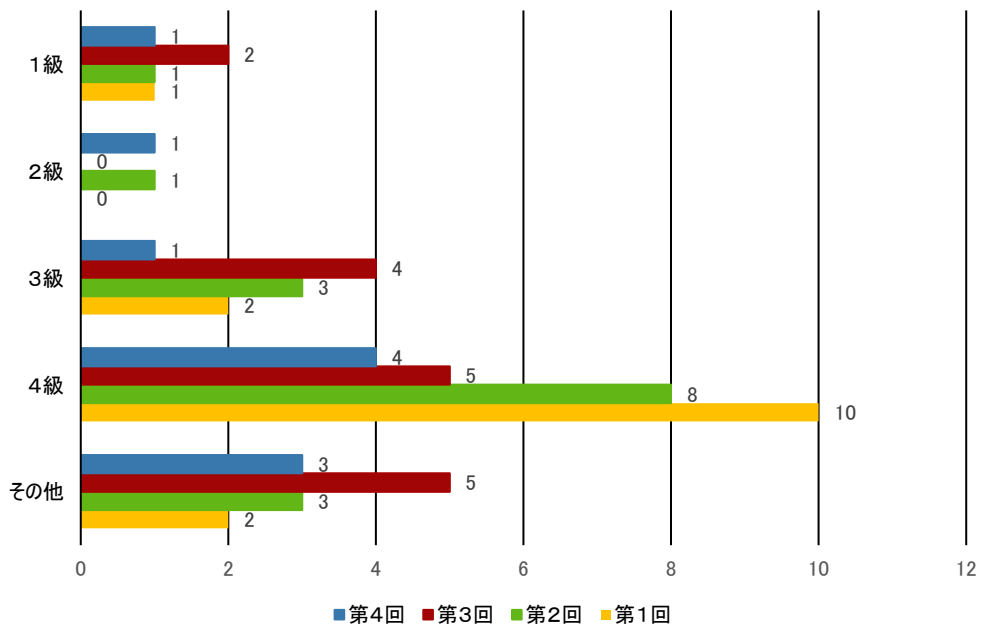
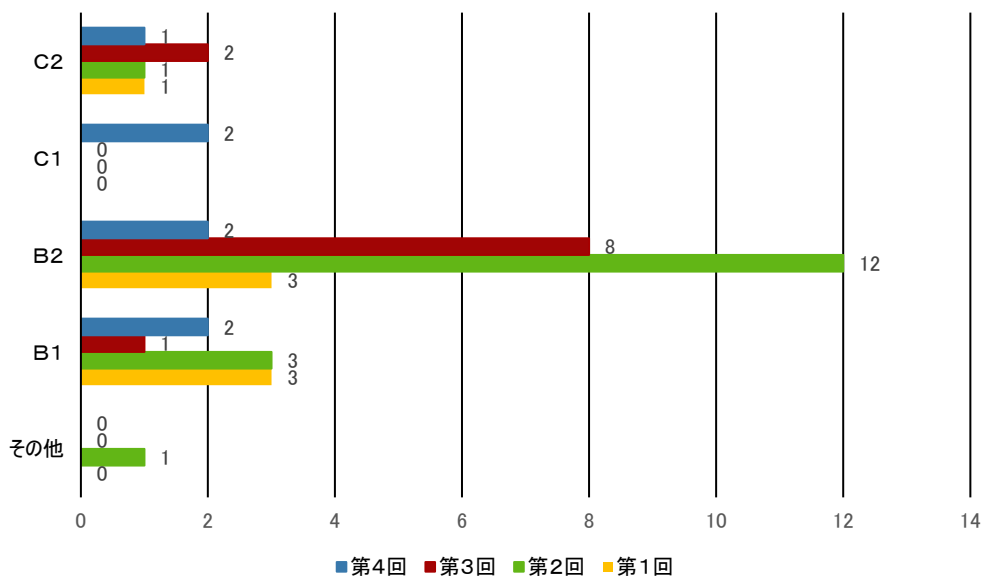


図 2-56 : DEL E 取得状況



### 2.5.3 1、2、3 年生の卒業後に希望する進路

1、2、3 年生に卒業後に希望する進路を訊いたところ、「就職」が最も多く67.7%、「決まっていない」が24.9%、「海外へ留学」が2.0%と続く（図2-57）。第3回調査時と比較すると、「就職」が若干減少し（第3回70.6%→今回67.7%）、「決まっていない」割合が上昇している（第3回20.1%→今回24.9%）。「就職」の内訳として、民間企業への就職を希望

する学生の割合（48.6%）が最多である点は過去の調査と同様である、

就職(民間)、就職(その他) と回答した学生に対し、希望する業種を訊いた結果が図2-58、図2-59である。希望就職先は「旅行・教育・サービス」が33.9%と最も高く、次いで「メーカー」が26.7% となっている。順位・割合とも経年的変化は見られない。

学年別推移でみると、「旅行・教育・サービス」が2年生から3年生で急激に減少しているのに対し、「メーカー」は急激に増加している。3年次で「旅行・教育・サービス」が減少し、「メーカー」が増加する傾向は、過去の全調査で同様にみられる。

図 2-57：希望の進路先

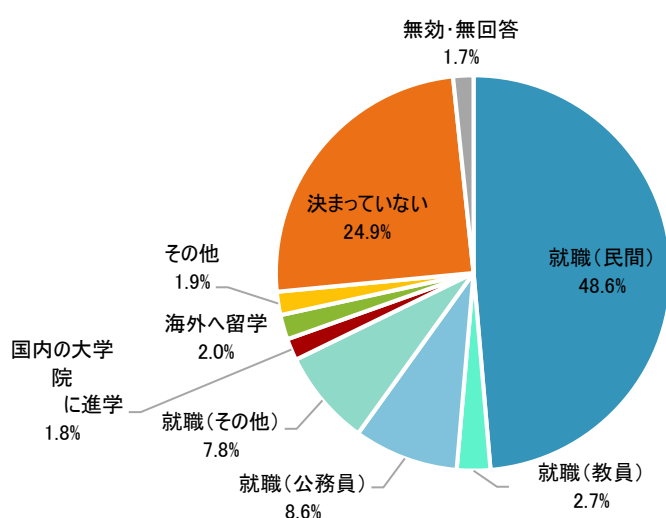


図 2-58：希望進路先

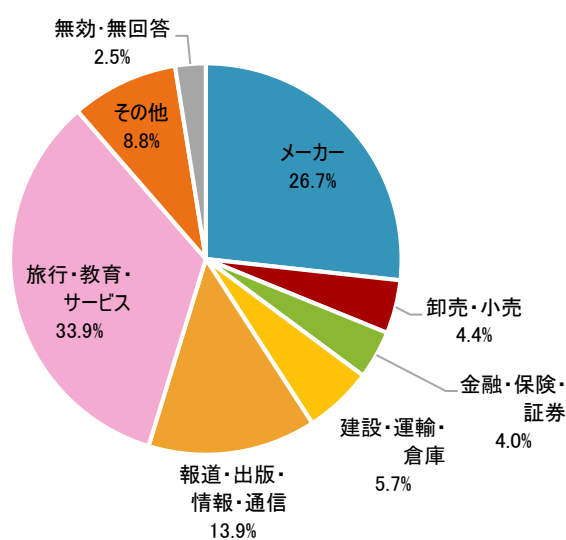
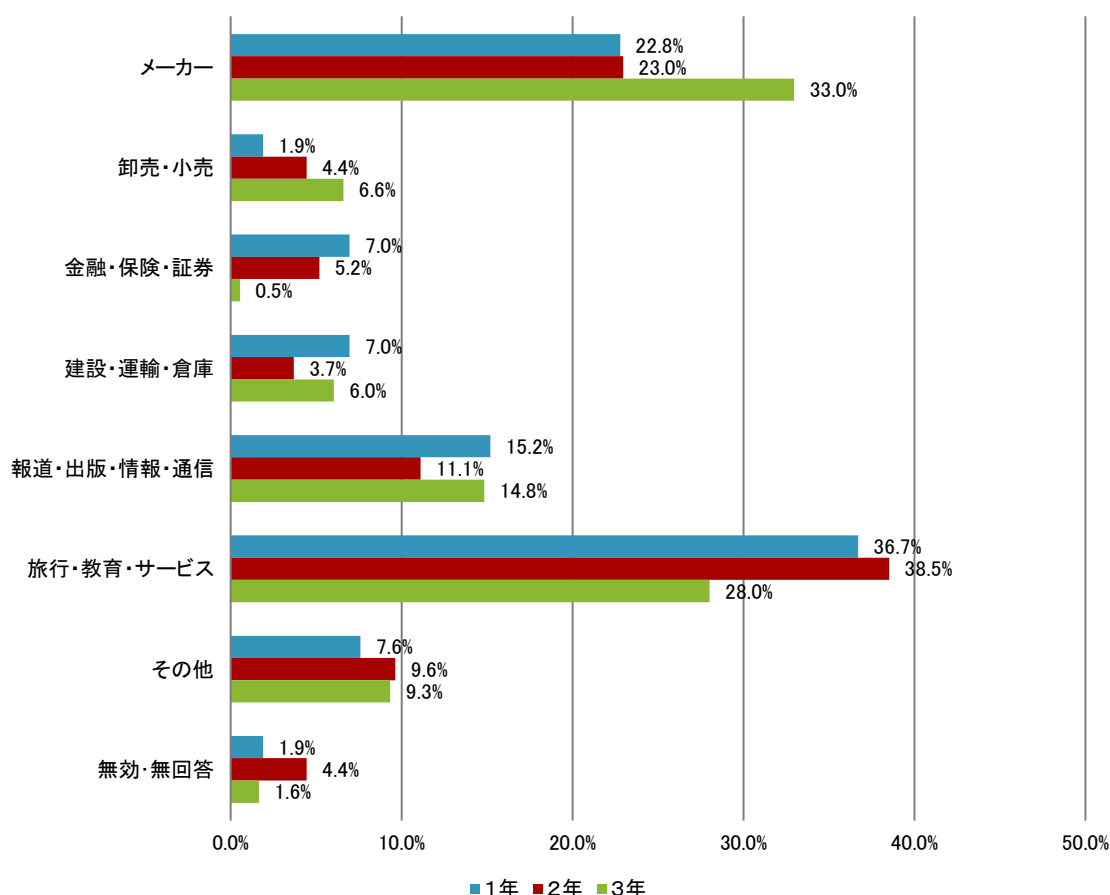


図2-59：希望進路先（1、2、3年 学年別）



## 2.6 個別状況（悩み、人間関係について）

学生生活にかかわる「悩み」や「不安」の有無を質問している。「よく悩む」、「少し悩む」という回答が合計で45.2%あるのに対し、「あまり悩まない」、「全く悩まない」の合計は53.4%である（図2-60）。第3回調査時と比較すると、悩んでいる学生・悩みが少ない学生の割合は微増している。相談相手は回答の多い順に、「友人」（41.7%）、「父母」（27.3%）、「相談しない」（20.7%）であり、第3回調査時と比べて「友人」に相談する学生の割合が減り、「父母」に相談する割合が増加している（図2-61）。この点においても、新型コロナウイルス感染症流行に伴う生活様式の変化が関係していると思われる。

学生相談室や授業に関する相談窓口など、学生生活に関するカウンセリング体制の満足度を調査したところ、「利用したことがない」が77.7%である。データのある第2回（85.0%）、第3回（82.7%）と比較して、最も低くなっている（図2-62）。

対人関係の満足度を調査している。先輩後輩関係について、「やや不満」、「不満」の合計は9.8%である（図2-63）。第3回（6.8%）調査時と比較すると、微増している。

図2-60：悩みや不安の有無

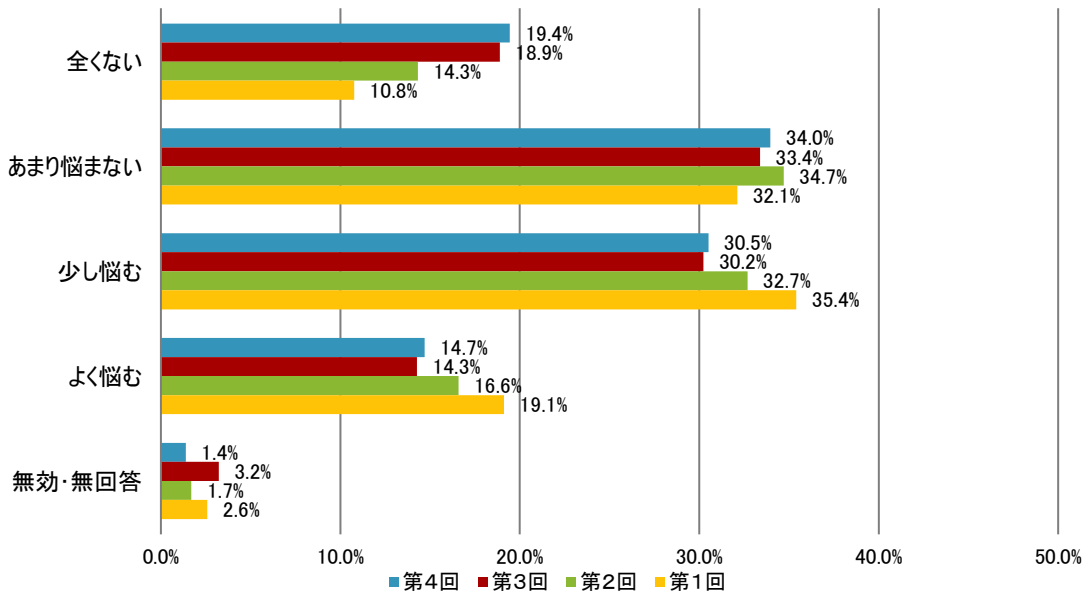


図2-61：悩みや不安の相談相手

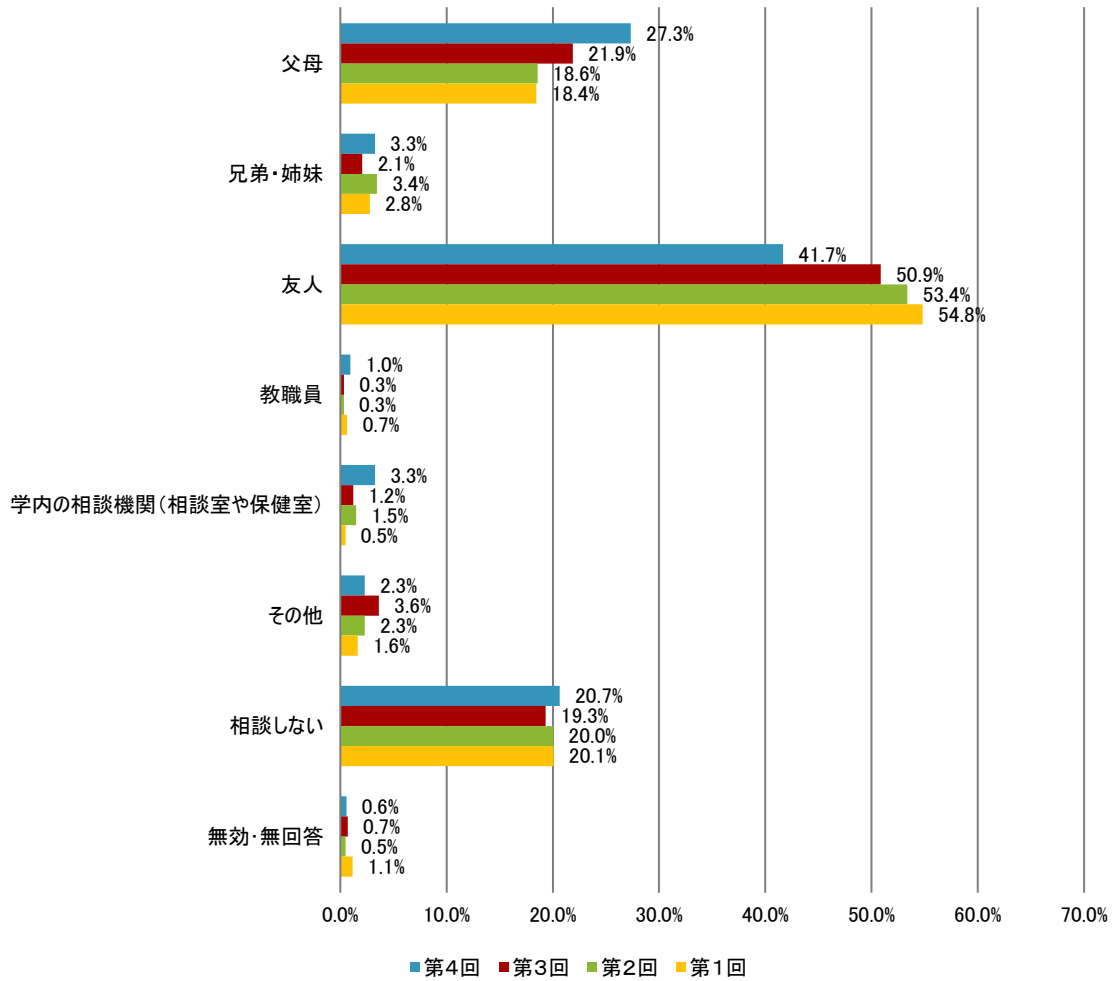


図2-62：カウンセリング体制の満足度

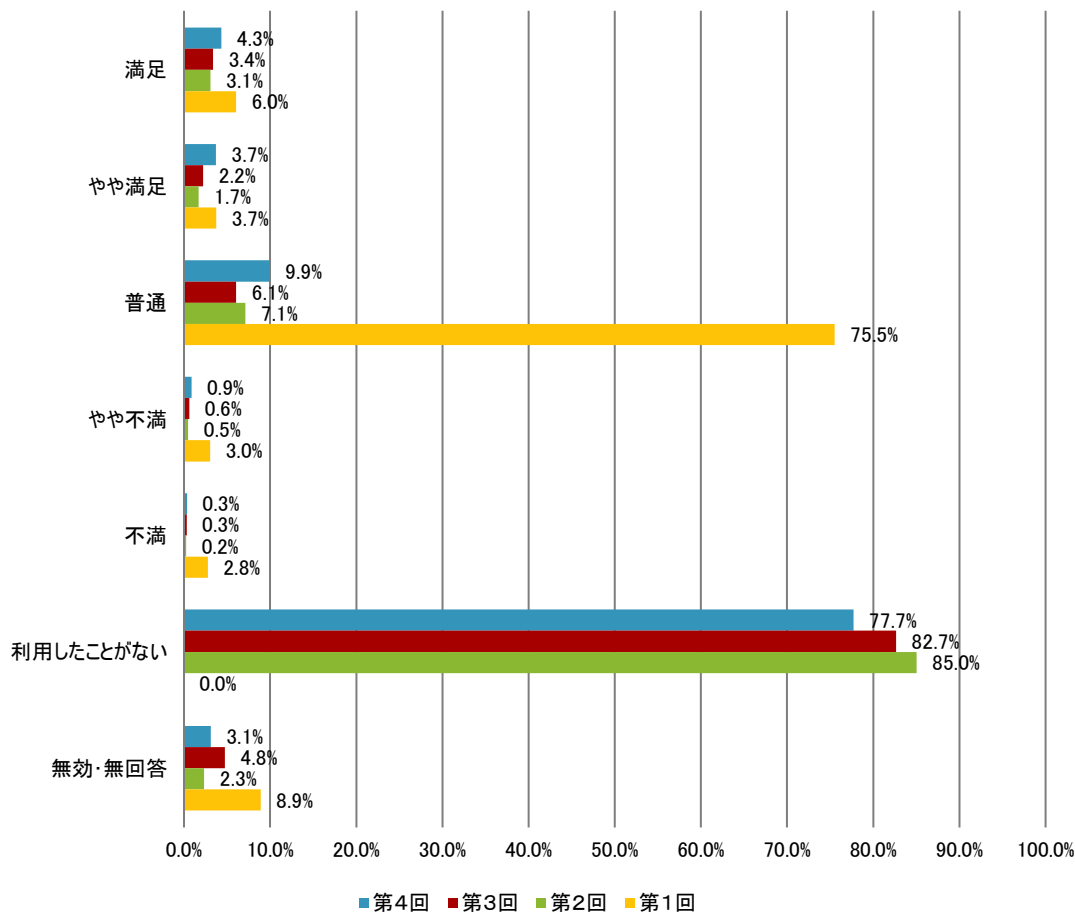
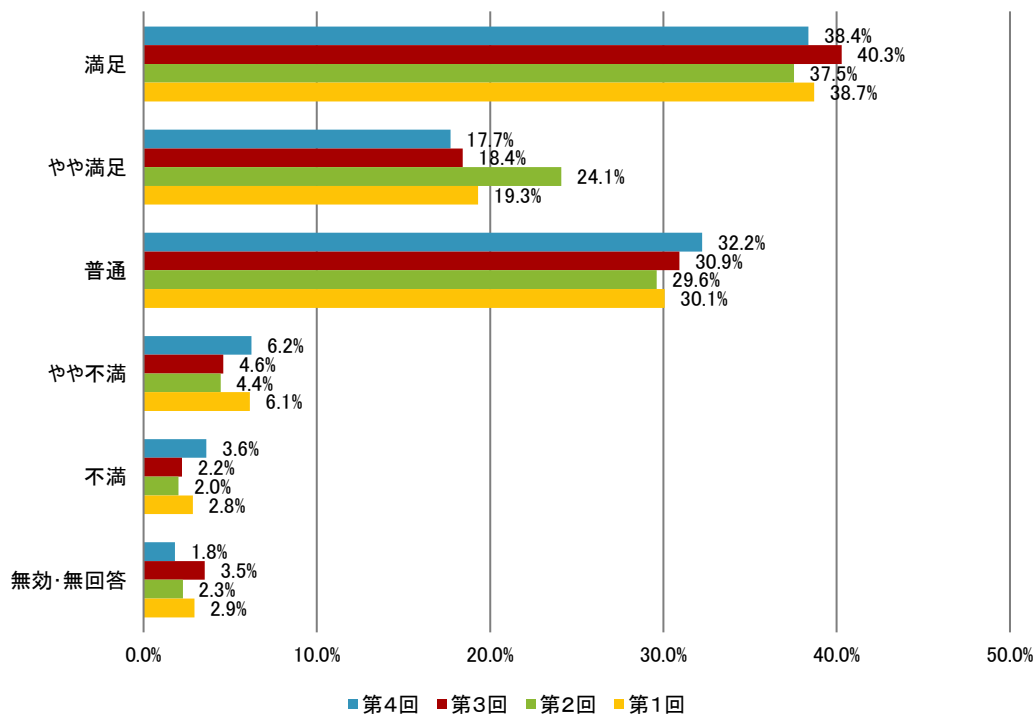


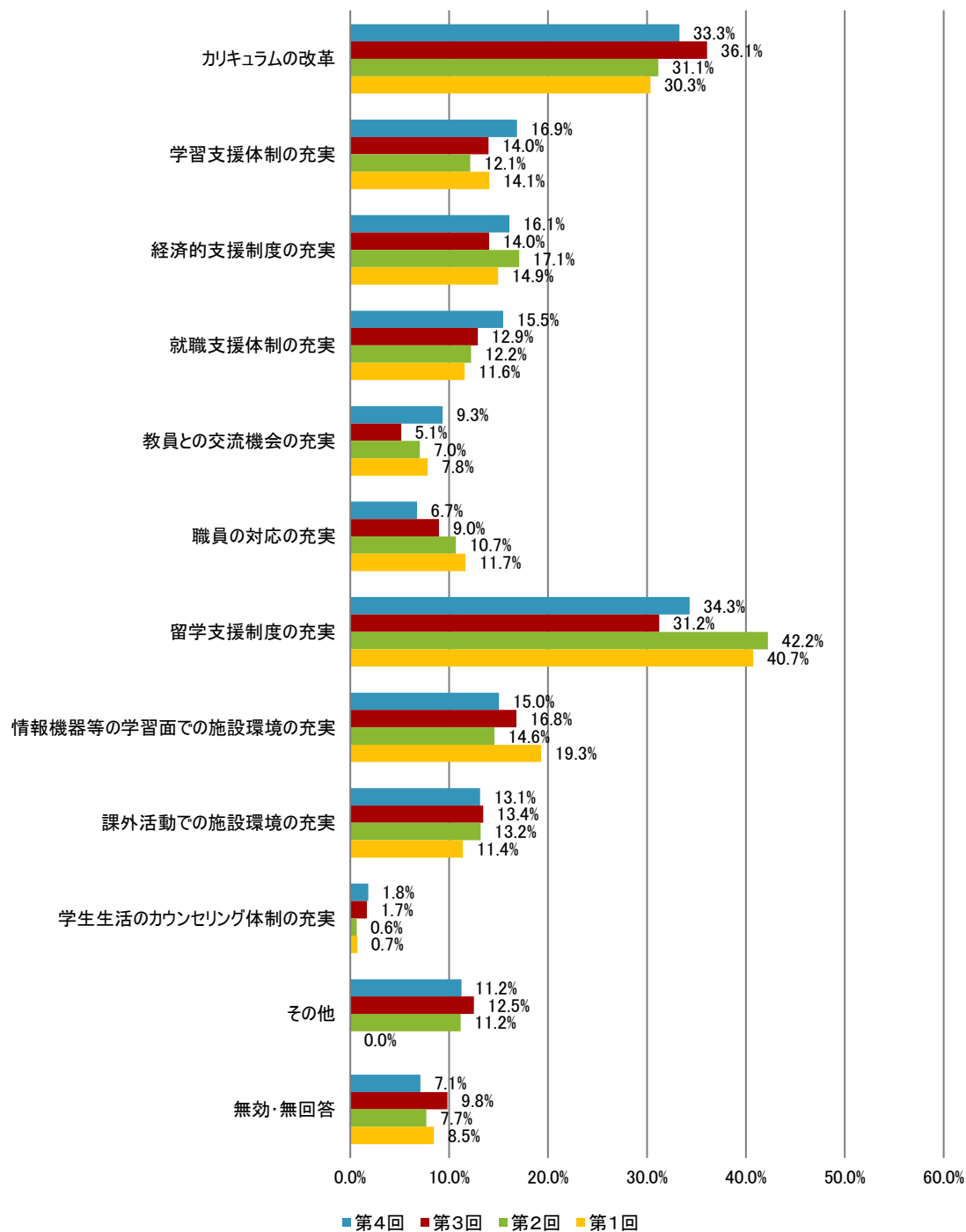
図2-63：対人関係（先輩後輩）の満足度



## 2.7 大学への要望・期待について

大学への要望・期待について質問した結果は図2-64の通りであり、「留学支援制度の充実」と「カリキュラムの改革」とが求められていることは第1回、第2回、第3回の調査時と同様である。第3回の調査時と比較すると、「留学支援制度の充実」が増加して最も回答率が高くなる一方、「カリキュラムの改革」は減少している。

図 2-64：大学への要望・期待について



## 【参考資料】

### 新型コロナウイルス感染症への対応

#### 1. 授業の実施について

##### (1) 実施状況

##### 2020年(R2年)度

**前期** 原則オンライン授業により実施

スポーツ方法、情報科学概論は6月より対面授業実施

**後期**

○開始～11月：オンライン授業主体にて実施

スポーツ方法、情報科学概論に加えて、1年生向けの専攻語学を中心に対面授業を拡大

○11月～1月：原則ハイブリッド方式により実施

ただし、履修者が85人以上の多数に上る授業の一部や、高齢者等で新型コロナウイルスの感染リスクが高い等の真にやむを得ない事情がある教員の担当授業については、引き続きオンライン方式のみでの授業を継続した。

(方針変更の理由)

兵庫県による「[新型コロナウイルス関連]業種ごとの感染拡大予防ガイドライン」が見直され、「座席間隔を最低限1m確保すること」などの施設面での制約が緩和された。

○1月14日～：全ての授業をオンラインのみで実施

(方針変更の理由)

緊急事態宣言の発出

##### 2021年(R3年)度

<基本方針>

原則ハイブリッド方式により実施

ただし、履修者が85人以上の多数に上る授業の一部や、高齢者等で新型コロナウイルスの感染リスクが高い等の真にやむを得ない事情がある教員の担当授業については、引き続きオンライン方式のみでの授業を継続。

また、新型コロナウイルス感染への危惧などを理由に対面授業を忌避する学生にも対応するため、オンライン授業も組み合わせた形態で授業を実施。

<特例措置を取った期間と対応>

○4月15日～4月25日：兵庫県は県内の各大学に対して、まん延防止等重点措置の対象期間はオンライン授業の積極的な活用を求める通知を出したため、本学でもこの期間のオンライン受講を積極的に推進した。

○4月25日～6月9日：緊急事態宣言が発出されたため、全ての授業をオンラインのみ実施することとした。[緊急事態宣言4/25～6/30]

○6月10日から6月23日(前期第9～10週)：奇数学籍番号と偶数学籍番号の学生が隔週で対面受講できるよう、分散登校を実施。



## 2022年(R4年)度

### 前期

<基本方針（2021年度と同様）>

原則ハイブリッド方式により実施

ただし、履修者が85人以上の多数に上る授業の一部や、高齢者等で新型コロナウイルスの感染リスクが高い等の真にやむを得ない事情がある教員の担当授業については、引き続きオンライン方式のみでの授業を継続。

また、新型コロナウイルス感染への危惧などを理由に対面授業を忌避する学生にも対応するため、オンライン授業も組み合わせた形態で授業を実施。

### 後期

感染防止対策を継続しながら可能な限り対面で実施

ただし、履修者が85人以上の多数に上る授業の一部や、高齢者等で新型コロナウイルスの感染リスクが高い等の真にやむを得ない事情がある教員の担当授業については、引き続きオンライン方式のみでの授業を継続。

また、高齢者、妊婦、基礎疾患のある方、左記の方と同居の方、新型コロナウイルスの感染リスクが高い等の真にやむを得ない事情がある学生については、大学への申請に基づきオンライン受講を許可する形で授業を実施。

## (2) 授業支援（授業の質の確保）

○文科省から、「遠隔授業」（オンライン授業）には「面接授業」（対面授業）に相当する教育効果が求められており、そうした教育効果を有すると認められる遠隔授業（オンライン授業）に必要な要素として、①設問解答、添削指導、質疑応答等による十分な指導と、②学生の意見の交換の機会が挙げられている。

○本学においては、オンライン授業は初めての試みであったため、2020(R2)年度前期の授業開始にあたって、前述の要素を備えたオンライン授業を行えるよう、(1) Zoom、Teamsといったウェブ会議システムの導入、(2) ポータルサイト・GAIDAI PASS への、教員-学生間の質疑応答や学生同士の意見交換を可能とする機能の追加、(3) ファイル等の共有が可能なオンラインストレージ「One Drive」の導入、(4) オンライン版のWord, Excel, PowerPoint, OneNote の供用等を行い、教員、学生それぞれに対して必要な説明・支援を行った。

○さらに、2020(R2)年度後期に対面授業を大幅に拡大した際には、LAN ケーブル等の、オンライン授業を併用したハイブリッド授業を実施するために必要な備品を、授業で使用する全教室へ配備し、カメラを上下左右に動かせる書画カメラ・WEBカメラを20台導入し、希望する教員に対し貸出を行った。

○また、「遠隔授業」（オンライン授業）における著作物の公衆送信について、2021(R3)年5月までに施行予定とされていた『平成30(2018)年著作権法改正（授業目的公衆送信補償金制度）』が、2020(R2)年4月28日からの早期施行が決定するとともに、2020(R2)年度に限り保証金を無償にするという扱いがなされた。

上記決定により、これまで①対面授業のための複製や②対面授業で複製等したものを同時中継の遠隔合同授業等のために公衆送信すること以外のインターネット送信において

は、個別に著作権者の許諾を得る必要があったものが、本制度の利用申請を行うことにより、改正著作権法第 35 条の提供範囲内で無許諾での利用が可能となった。

○前述の決定を踏まえ、本学においてもオンライン授業を円滑に行うため、本制度の利用申請を行い、2021(R3)・2022(R4)年度も授業運営に支障が生じないよう、引き続き本制度の利用申請を実施。

## 2. 海外渡航（留学）の停止と再開について

従来、本学では外務省海外安全情報・感染症危険情報 危険レベル 2（不要不急の渡航自粛）以上の国への渡航は原則不許可としており、コロナ禍においても同様の取扱いとしていた。

しかしながら、2021(R3)年 6 月 15 日付け文科省通知（3 文科高第 333 号）において、諸外国で感染対策が進み感染状況が落ち着いてきたこと、日本においてもワクチン接種が進んだことなどから、9 ヶ月以上の大学間交流協定等に基づく留学について、COVID-19 の感染拡大を理由とする海外感染症危険情報レベル 2 以上の地域への渡航が許可されたことを受け、本学においても、2021 年 6 月に、制度を問わず 1 学期（3 ヶ月）以上の海外留学について、誓約書提出を条件に渡航制限を撤廃した。

さらに、2022 (R4) 年 2 月 4 日付文科省事務連絡では、留学期間にかかる制限が撤廃されたことから、本学においても、2022 年 4 月以降、COVID-19 の感染拡大を理由とするレベル 2 以上地域への留学を目的とする海外渡航については、期間の長短に関わらず、許可することとした。